

平成22年度 慶應義塾大学体育研究所 活動報告書

追悼 松田雅之君

特集：公開講座「スポーツと健康」



目 次

「巻 頭 言」 所長 植田史生	1
「追 悼 松田雅之君」 植田史生・村山光義	3
I. 特集 公開講座「スポーツと健康」	
『転ばぬ先の知恵—転んで寝たきりにならないために』 石手 靖	7
II. 研究活動記録（研究委員会）	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	15
2. 所内定例研究会発表要旨	25
3. 大学体育連合中央研修会参加報告	33
III. 教育活動記録（教育委員会）	
III-1. 授業の実施	
1. 平成22年度体育科目の履修者統計	39
2. 授業評価の実施	43
3. 通信教育対象科目	51
4. 他学部における体育関連授業の展開	52
III-2. スポーツイベントの開催（スポーツ振興委員会）	
1. 塾長杯・塾内競技大会	53
2. 公開講座	55
3. 所内施設の開放	56
IV. 業務活動記録（石井主事）	61

巻 頭 言

大学体育研究所

所 長 植 田 史 生

はじめに、非常に辛く悲しいことですが、我々の同僚である慶應義塾大学准教授（大学体育研究所）松田雅之君には、平成22（2010）年11月13日夕刻にご逝去されました。謹んで哀悼の意を表すとともにご冥福をお祈りいたします。

平成23（2011）年3月11日14時46分頃、宮城県三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震が発生しました。この東日本大震災において被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。また、被災地の一日も早い復旧、復興を心よりお祈りいたします。気象庁の観測によれば、明治以降の観測史上最大の値、国内史上最大級の規模、世界史上4番目に強い地震であるとのこと。地震災害発生後、未曾有の津波災害、その被災による福島県にある東京電力福島第一原子力発電所事故、風評被害と四重の悪夢の連鎖がおきました。この大震災時の被災者の皆様の冷静な行動は世界中から称賛されました。日本ではなぜ暴動が起きないのかと。日本人の持っている道徳心、特に東北人が持っている誠実さと粘り強さ等々、豊かな人間性が感じられます。これから復旧、復興に向け身体的にも精神的にもスポーツの果たす役割は大きいと思います。

平成22（2010）年4月5日に日本学術会議は、「21世紀の教養と教養教育」において、「大学教育における体育・健康教育は、高校までのような多面的・包括的な教育課程によって制約されるものではないが、心身の健康維持や選択した種目の活動を通じて技量形成・仲間づくりに加えて、保健体育の意義、身体の理と自然や生活様式などとの関係についての理解を深めるという点でも重要である。さらに言えば、この教育・学習活動は、芸術関連の活動とともに、非言語的な表現能力・コミュニケーション能力の形成という点でも重要である。（中略）体育や芸術の活動における自己表出・自己表現の作用は自己発見や自己との出会いの契機として、豊かな人間性・市民性を培うという点でも重要であろう。」と提言しています。このことは、平成3（1991）年の設置基準の大綱化以降、本研究所が様々な改革を行ってきたなかで、構想として掲げ目標としている「独立」と「協生」を涵養する、「感動体験を基礎とした新しい教養教育」により「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」ことに符合していると思います。このことを実践するためには優れた研究者、科学的根拠を持った指導者が求められると思います。本研究所創立50年である来年度に向け、体育・スポーツにおける理念や目標の意味と重要性を認識し、研究・教育活動の充実、スポーツ振興の遂行、他諸機関との連携等、益々努力していかねばならないと思います。

追悼 松田雅之君

慶應義塾大学准教授、松田雅之君には平成22年11月13日(土)、急逝されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

平成22年度の活動報告書発行に当たり、告別式での植田所長の弔辞ならびに、松田君の足跡と想い出を記録に残しておきたいと思います。



弔辞

平成22年11月19日(告別式：妙蓮寺斎場にて)
慶應義塾大学体育研究所所長 植田史生

松田君、いま君の霊前にお別れのご挨拶を申し上げなければなりません。人生のはかなさを感じずるにあまりある悲しみです。

六日前の君は、呼べば答える君でした。君が亡くなったという、思いもよらぬ悲しい知らせを受けた瞬間、私は暗闇に突き落とされたような絶望感に襲われ、言葉もなく立ちすくんでいました。

一樹の陰、一河の流れ、袖すりあうも他生の縁といいますが、君と僕は昭和52年3月に慶應義塾大学を卒業し、大学体育研究所に奉職しました。学生時代は競走部に所属し特に走り幅跳びは良い成績であったと記憶しています。爾来、体育実技では一貫して陸上競技を担当しました。大学設置基準大綱化の折には卓球も担当するなど多彩を極めました。オリンピックやドーピングについて、熱く語りかける講義や、塾長杯バレーボール大会における珍プレー、塾内卓球大会における鋭いスマッシュ、スキーやジョギング教室での人をそらさぬユーモア、どれも当意即妙な洒脱さに備わる君の人格のしからしめたものだと思います。特に宴会の席での美川憲一の物まねやあの巧妙なおどけは忘れることができません。

君は、実にスポーツマンらしい爽やかな人柄で、誰からも好かれ、円転滑脱趣味も豊かで、いつも多くの友人に囲まれていました。

また、競走部のコーチ、監督を長年務めましたね。多くの部員、OBの信頼も厚く的確な指導をしていました。関東学生陸上競技連盟の役員も務め、君が陸上競技の発展に尽くされた功績は非常に大きいと思います。

ここでひとつ苦言を呈しなけばなりません。それは胃潰瘍を二度も克服したにも関わらず、健康に留意しなかったことです。ヘビースモーカーであったことと、血圧が高いにも関わらず処方された薬を飲んでいなかったことです。非常に残念です。

まっちゃん、君にはわからないだろう。このたびの突然の死が、ご家族のみならず大学体育研究所にとってもどれだけ大きな悲しみを誘うものであるのか。私たちの胸は、悲しい思いで今にも張り裂けそうです。お嬢様の幼稚舎ご入学から大学ご卒業までの、成長されている話を誇らしげに、嬉しそうにはにかみながら話す姿を思い出します。

ここにこうして告別の言葉を述べながらも、君の永遠の眠りの表情があまりに平和であり、例の酔後の一睡そのままだったので、君の他界を信ずる気持ちにどうしてもなれません。

日吉キャンパスをこよなく愛した君の赤い愛車は今でも日吉に駐車されています。今にも運転席から降りてくるような錯覚を覚えます。

日吉の丘は私達の故郷です。共に働き、共に楽しんだ過ぎ去りし日の思い出をいつまでも胸に秘めて、これから先も常に君と共にあるつもりで教育、研究に一層の努力をしたいと思います。

別れは辛く名残は尽きません。が、最後に君の在りし日の遺影の前で、永遠の別れを申し上げ、衷心よりご冥福を祈って弔辞といたします。まっちゃん、ゆっくりと休んでください。

突然のお別れ

松田君は、11月13日のお昼過ぎに体育研究所3階の談話室で倒れ、救急車で搬送されるも、午後3時、病院で息を引きとられました。56歳でした。当日は、三田祭（学園祭）の前夜祭として研究所隣の日吉記念館でコンサートが行われる日で、午後からの建物周辺での学生対応等にそなえ、所員ら数名が談話室にて昼食を準備し集まっていました。松田君は準硬式野球部の創部60周年記念式典に出席する前にそこに立ち寄りしました。アイドルのコンサートを話題に、ともに食事をとろうとしたところ、急に倒れました。居合わせた所員らが懸命に救急対応にあたりましたが、その笑顔を二度と見ることはできませんでした。大動脈瘤乖離による急逝で、現場にいた所員・関係者のショックははかりしれないものでしたが、研究所内で仲間が対応して救急搬送できたことが、せめてもの救いだったのかもしれませんが。当日運転してきた松田君の愛車が、葬儀後もしばらくキャンパスの並木道沿いに止まっていたことが、寂しさを増幅するとともに、信じられないという思いに駆られたことを思い出します。

陸上競技とともに

松田君は塾体育会競走部の出身で、卒業後体育研究所に奉職しました。陸上競技では中学（走り幅跳び：全国通信陸上競技大会2位）、高校時代（三段跳び：高校ランキング12位）から優秀な選手であり、大学でも走り幅跳びの7mジャンパーとして活躍しました。さらに、教員となった後も競走部のコーチをしながら自身の競技生活を続け、1981年（昭和56年）には27歳で走り幅跳び7m28cmの自己ベストをマークし、その年の日本ランキング45位になっています。

1991年（平成3年）から12年間、体育会競走部監督を務め、関東学生陸上競技対校選手権大会（関東インカレ）の1部校として優秀な選手を育てました。陸上競技場や日常生活で常に部員とコミュニケーションを図る姿勢は指導者の鏡ともいえるもので、多くの後輩に慕われていました。また関東学生陸上競技連盟評議員（表彰委員・ドーピング対策委員・強化委員等）を長く務め、インターカレッジや箱根駅伝における諸活動を通じて学生陸上競技界の活動を支えて来ました。さらに、塾体育会準硬式野球部やサッカー部等のランニング指導、地元日吉台小学校でも指導をするなど、その明るく優しい人柄はいつも多くの人々に喜びをあたえていました。



箱根駅伝の往路表彰にて（2004）

研究成果

研究活動では陸上競技指導に関するものが中心テーマでありました。主な研究成果について以下に示しました。近年は、光電管による速度計測システムを利用した選手への即時的フィードバックによる指導法について研究を行っていました。特に、200m走や走り幅跳びの助走における速度曲線に関するデータは新規性が高く、その成果の発信が待たれるところでした。また、オリンピックの歴史やドーピング問題に関しても詳しく、2007年発刊の「スポーツ・健康科学テキスト」ではスポーツの歴史について分担執筆もしています。

著書・論文

松田雅之：スポーツの歴史，スポーツ・健康科学テキスト（弘卓三 森田恭光 編著，杏林書院），pp2-4（2007）

松田雅之：長時間運動とLDH・CKP 血清アイソザイム，慶應義塾大学体育研究所紀要，第23巻第1号，p53-59（1983）

松田雅之，近藤明彦：男子スプリンターにおける下肢筋群の筋トルク特性，慶應義塾大学体育研究所紀要，第34巻第1号，p21-28（1994）

松田雅之，石井哲次，石濱慎司，弘卓三：100m 走におけるスピード曲線の即時的フィードバック効果について，慶應義塾大学体育研究所紀要，第41巻第1号，p15-21（2002）

学会発表

松田雅之：100m 走におけるスピード曲線の即時的フィードバックについて，第51回日本体育学会（2000）

松田雅之，丸田巖，山内賢：高校スポーツ選手のサプリメント摂取状況（その2），第58回日本体育学会（2007）

松田雅之，丸田巖：200m 走におけるスピード曲線のフィードバック効果について，日本体育学会第60回記念大会（2009）

松田雅之，丸田巖：走り幅跳びにおける光電管および映像によるフィードバック効果について，第61回日本体育学会（2010）



光電管による速度計測（左端が松田君）（2009）

教育・スポーツ振興活動

松田君は、陸上競技を通じた教育の他、その明るく楽しい人柄を活かし多彩な教育活動にも貢献されました。1993年（平成5年）大学設置基準の大綱化以降は、陸上競技以外にもジョギングや体力アップコース、卓球等の授業を担当しました。また、スキー指導にも熱心に取り組み、シーズンスポーツや通信教育課程のスクーリングの指導スタッフとしても活躍しました。2009年（平成21年）には全日本スキー連盟1級を取得しました。



また、塾内教職員でマラソンや駅伝大会を楽しむ仲間の輪（通称：慶應ランナース）が広がり、ジョギング指導とともに2000年（平成12年）には自身も筑波マラソンに挑戦しました（残念ながら途中棄権でしたが…）。さらに、2002年（平成14年）からは、体育研究所のスポーツ振興活動の一環である公開講座「健康ジョギング教室」の講師を務め、特別講師にマラソンの元オリンピック代表・瀬古利彦氏を招くなど、毎年、教職員や一般の参加者から好評で、その存在感は大変大きなものでありました。



健康ジョギング教室（2010.11）

お別れに

カラオケ好きで、いつもみんなを楽しませてくれた松田君。そんな人の好きもあり、今思えば、自身が体調管理に無頓着であったことに、周囲も強く苦言を呈することができなかったことを反省します。名選手でジョギングの指導者であっても日々の健康意識が重要であることをあらためて認識するところです。我々は松田君の早すぎる旅立ちを無駄にせず、健康の維持増進、体育・スポーツの普及振興に今後も邁進しなくてはなりません。

松田君、永久に安らかに。そして、いつまでも慶應義塾を見守っててください。

松田雅之君 略歴

- 1954年（昭和29年）5月 静岡県浜松市生まれ
- 1973年（昭和48年）3月 静岡県立浜松北高等学校卒業
- 1977年（昭和52年）3月 慶應義塾大学法学部政治学科卒業
- 〃 4月 慶應義塾大学体育研究所助手
- 1984年（昭和59年）4月 慶應義塾大学体育研究所専任講師
- 1980年（昭和55年）4月 関東学生陸上競技連盟評議員（2006年・平成18年まで）
- 1991年（平成3年）11月 慶應義塾体育会競走部監督（2003年・平成15年まで）
- 1993年（平成5年）4月 東京都陸上競技協会理事
- 1995年（平成7年）4月 慶應義塾大学体育研究所助教授
- 2007年（平成19年）4月 慶應義塾大学体育研究所准教授

（文責・村山光義）

I. 特集：公開講座「スポーツと健康」

『転ばぬ先の知恵—
転んで寝たきりにならないために』

石手 靖

2010年度公開講座「スポーツと健康」 「転ばぬ先の知恵 ～転んでねたきりにならないために～」の開催

平成23年3月5日(土)午後1時から4時までの3時間にわたり、慶應義塾大学日吉キャンパス協生館藤原洋記念ホール他にて、2010年度公開講座「スポーツと健康」を開講した。この「スポーツと健康」という公開講座は昨年度まで慶應義塾大学スポーツ医学研究センターと同大学院健康マネジメント研究科主催、ならびに同大学院健康マネジメント研究科ヤマト寄附講座協賛の下で開催されていたものである。今年度はその企画運営に我々体育研究所も加わることが叶い、約100名の参加者を得て盛会裏に終了できたことはこの上ない喜びである。先ずは本講座開催にあたり御協力頂いた関係各位に対し、この場をお借りして心より御礼申し上げたい。

今回の講座のテーマは諺の「転ばぬ先の杖」に一つ捻りを加え、「転ばぬ先の知恵 ～転んでねたきりにならないために～」と題し、骨の健康、転倒予防の下肢トレーニング、骨密度、骨粗しょう症、骨をつくる食事等々をキーワードとして、地域の方々、特に中高齢者の方々を対象に健康に対する意識を高めて頂くことを目的の一つとして企画した。

その内容は初めに藤原洋記念ホールにて、石田浩之氏(慶應義塾大学スポーツ医学研究センター)の「転んでおきる困った事と転ばないように今からできる事」という演題で、生活習慣病の運動療法を中心とした外来診療



基調講演@藤原洋記念ホール

の御経験から約1時間の基調講演で始まった。その後、5つのワークショップに分かれ、各分野の専門の先生方やフィットネスクラブのインストラクターの方々に興味深いご指導を頂くことが叶った。

ワークショップ1は協生館エクササイズスタジオにて、「気功と東洋医学(薬膳療法)から転倒予防を考える」と題し、慶應義塾大学体育研究所非常勤講師として体育実技の「気功」の授業を担当して頂いている河乃建仁氏(小田原循環器病院運動生理学研究室主任研究員)から気功は姿勢保持能力に寄与し、薬膳は神経伝達機能を向上させ、転倒予防に役立つという理論の解説と実技がなされた(30名参加)。



気功@エクササイズスタジオ&トレーニングルーム

ワークショップ2は日吉プールにて、「中高齢者における転倒予防のための水中運動」で金田晃一氏(日本学術振興会特別研究員・慶應義塾大学SFC研究所上席所員(訪問))



水中運動@プール

より水中ウォーキングの実技を中心に、転倒予防に役立つ水中運動プログラムが紹介された（10名参加）。

ワークショップ3では「健康歩き方講座～快適生活を目指して～」というテーマで慶應義塾大学総合政策学部在学時から経験を積んでいるスタジオレッスンやジムでの指導を踏まえて、山本東奈氏（セントラルスポーツ株式会社）より「正しい歩き方をマスターして健康美人を目指しましょう！」とのキャッチフレーズで様々な歩行方法が紹介された（32名参加）。このワークショップのみ屋外の日吉陸上競技場での実施となり、当日の天候を心配したが幸いにも穏やかな好天に恵まれ参加者は気持ちの良い汗を流すことができた。



健康歩き方講座@陸上競技場

ワークショップ4は基調講演後の藤原洋記念ホールステージを利用して、「転倒予防のための簡単にできる椅子体操」を高橋紀子氏（セントラルスポーツ株式会社）が日頃からフィットネスクラブのインストラクターとして指導しているエアロビクス、アクアビクス、ヨガ、スイムレッスンの経験を生かした椅子を使った運動指導がなされた（7名参加）。



椅子体操@藤原洋記念ホール

ワークショップ5では協生館内の日吉メディカルクリニックにて骨密度検査等を実施した（21名参加）。



骨の知識@日吉メディカルクリニック

当日参加頂いた約100名の一般市民の皆様にとって、本講座の内容が有意義であり、かつ皆様の健康に対する意識を高めることができたのであれば主催者の一人として非常にうれしい限りである。加えて、一般市民の皆様が慶應義塾日吉キャンパスの施設をご紹介できたことは慶應義塾にとって価値あることと感じた。今回の会場としたキャンパスの入口に位置する慶應義塾協生館は、開放型キャンパスとしての機能を充実し、社会・地域連携を展開する場として慶應義塾内外の方々にご活用頂くよう建てられたもので、メイン会場の藤原洋記念ホールやプール、陸上競技場等々を使用したことで、この協生館の地域における知名度を少なからず上げることができたのではないかと感じる。そしてもう一つ、日吉メディカルクリニックやセントラルスポーツ(株)等の協生館に入っている企業の協力を得て開講できたことは相互のコミュニケーションの活性化に繋がったと思っている。

最後にもう一度、本講座が慶應義塾大学スポーツ医学研究センター、同大学院健康マネジメント研究科、同体育研究所の組織連携により企画開催できたことをうれしく思い、今後もこのような公開講座を企画立案し、大学と地域とのつながりを深め、さまざまな人々が集い交流し、連携を実現していく場を提供したいと考える。

2010 年度公開講座「スポーツと健康」

転ばぬ先の知恵

～転んで寝たきりにならないために～

慶應義塾大学スポーツ医学研究センター・同体育研究所・同大学院健康マネジメント研究科 主催

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科ヤマト寄附講座 協賛

日時：2011 年 8 月 5 日（土） 13:30～16:00

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス協生館 2F 藤原洋記念ホールほか

～～～ 講演内容 ～～～

13:30～14:30 基調講演

演題名：転んでおきる困った事と転ばないように今からできる事

講師：石田浩之（慶應義塾大学スポーツ医学研究センター准教授） 会場：藤原洋記念ホール

15:00～16:00 ワークショップ

*ワークショップはお申し込み先着順の定員制となります
(お申し込み時に ご希望のワークショップの番号を
第3希望まで明記ください)。

1. 気功と東洋医学（薬膳療法）から転倒予防を考える

講師：河乃建仁氏（北京中医薬大学アモイ臨床医学院客員教授・慶應義塾大学体育研究所非常勤講師）

会場：協生館エクササイズスタジオ（B1） 定員：20～30名

内容：気功は姿勢保持能力に寄与し、薬膳は神経伝達機能を向上し、転倒予防に役立ちます

2. 中高齢者における転倒予防のための水中運動

講師：金田晃一氏（日本学術振興会特別研究員・慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員（訪問））

会場：協生館プール（B1） 定員：20～50名

内容：水中ウォーキングを中心に、転倒予防に役立つ水中運動プログラムを紹介します

3. 健康歩き方講座 ～快適生活を目指して～

講師：山本東奈氏（セントラルスポーツ㈱） 会場：日吉陸上競技場 定員：100名

内容：正しい歩き方をマスターして、健康美人を目指しましょう（雨天の場合、内容の変更がございます）

4. 転倒予防のための簡単にできる椅子体操

講師：高橋紀子氏（セントラルスポーツ㈱） 会場：藤原洋記念ホール 定員：100～250名 内容：椅子を使った運動指導

5. 骨の知識

講師：日吉メディカルクリニック 会場：日吉メディカルクリニック 定員：30名

内容：骨密度検査（検査は素足で行います。ご希望の方は素足になりやすい服装でお越しください）

○ 募集要綱 ○ 対象：一般 受講料：¥1,000 申込期間：2月1日（火）～28日（月）

申込方法：住所・氏名（ふりがな）・年齢・性別・電話番号・職業・希望ワークショップの番号（第3希望まで）を
明記の上、e-mail、FAXにて下記宛にお申し込みください。

「2010 年度スポーツと健康公開講座」事務局 e-mail: spo-kokai@adst.keio.ac.jp FAX: 045-563-3979 <お問い合わせ> 電話: 045-563-3978

HP: <http://sports.hc.keio.ac.jp> * 受講料は当日現金にてお支払いください。 * 申込受付後に受講に関するご案内をいたします。

当講座の受講者にかかる個人情報、1.住所、2.氏名、3.年齢、4.性別、5.職業、6.電話、7.Fax、8.E-mail アドレスです。これらの個人情報は、1.講座の実施運営に関する管理・連絡および手続、2.大学内施設等利用に関する管理・連絡および手続、3.修了証の発行、4.次年度以降の講座開催の案内に利用いたします。なお、講座運営に関する業務の委託を受けた受託業者において、委託業務を遂行するために必要となる範囲で、個人情報を提供する場合があります。また、委託業務の遂行以外においては個人情報を第三者に提供いたしません。ただし、法律上開示すべき義務を負う場合や、受講者本人の生命、身体、財産その他の権利利益保護のために必要であると判断できる場合、その他緊急の必要があり個別の承諾を得ることができない場合には、例外的に第三者に個人情報を提供する場合もあります。

Ⅱ. 研究活動記録

(研究委員会)

1. 個人研究業績・教育業績・研究助成

植田 史生【教授】

学会発表等

- ・吉田泰将, 村山光義, 加藤幸司, 植田史生, 内山孝憲, 鈴木文菜, “加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み(その4)”, 日本武道学会第43回大会, 東京, 2010年9月.
- ・Murayama M, Ishide Y, Ueda F, Ohshiro T, “Effect of Laser irradiation on recovery from exercise-induced skeletal muscle fatigue in humans”, The Asian Pacific Association for Laser Medicine and Surgery, nagano, 2010.10.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・南ドイツ剣道夏季稽古会講師, 2010年9月
- ・ハーヴァード大学剣道部秋季稽古会講師, 2010年11月

(役職)

- ・第32期(後期)教職員評議員, 2010年10月まで
- ・日本レーザー・スポーツ医科学会理事
- ・ハーヴァード大学剣道部 ヘッドコーチ
- ・ハーヴァード大学剣道部 ライフタイムディレクター

当年中の研究教育活動の概要

日本医用レーザー研究所と共同で, 低反応レベルレーザー照射による筋機能と金硬度評価に関する研究を行った。また, ハーヴァード大学とドイツ(マンハイム)で剣道指導を行った。

近藤 明彦【教授】

学会発表等

- ・近藤明彦, 丸田巖, “スポーツにおけるポジティブな社会的態度の決定要因としての価値観と達成目標—高校生を対象として—” 日本体育学会第61回大会, 愛知, 2010年9月.
- ・kondo A, Ichimura S, “Relationship among Values, Goals and Morality in Basketball Players”, 第7回日独スポーツ科学会議, 東京, 2010年10月.

安藤 勝英【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・米国カリフォルニア州立サンノセ大学柔道指導, 2011年2月-3月.

(役職)

- ・塾体育会柔道部師範, 通年.
- ・東京学生柔道連盟理事, 通年.

佐々木玲子【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・楠原慶子, 田代幸代, 佐々木玲子, “幼稚園教諭の身体活動量と形態的特性”, 立教女学院短期大学紀要, 42, 125-135, 2010.
- ・石沢順子, 佐々木玲子, 松寄洋子, 吉武 裕, “保育園に通う幼児の日常身体活動量”, 東京純心女子大学紀要15, 21-28, 2011.

(執筆)

- ・佐々木玲子, : 跳ぶ動作・運動の発達と指導, 子どもと発育発達, 8-3, p.203-205, 2010
- ・佐々木玲子, : 子どもの現状が知らせるもの～スポーツ・運動遊びの重要性, スポーツジャーナル, vol.285, p.13, 2010.
- ・佐々木玲子, : 幼児期の体力と運動, 東京都国立幼稚園長会報, 第123号, p.2-3, 2011

(執筆, 制作)

- ・財団法人日本体育協会 みんなで遊んで元気アップ! アクティブ・チャイルド・プログラム (冊子およびDVD), 一 文部科学省委託事業ー子どもの発育発達に応じた体力向上プログラムの普及啓発, 2010.

(監修)

- ・特集 子ども体力向上に向けて 幼児はこうして遊ばせよう! スポーツジャスト, pp.9-17 2011 March vol.476 (財) 日本体育協会
- ・連載 子どものからだ スポーツジャスト, vol.467, p.42, 2010
- ・連載 子どものからだ スポーツジャスト, vol.471, p.42, 2010
- ・連載 子どものからだ スポーツジャスト, vol.472, p.42, 2010

学会発表等

- ・佐々木玲子, 石沢順子, “幼児における日常身体活動量と基本的運動能力”, 日本体育学会第61回大会, 愛知, 2010年9月.
- ・永野順子, 安広美智子, 佐々木玲子, “不安定板上の動的バランスと運動歴、運動介入の影響”, 第65回日本体力医学会, 千葉, 2010年9月.
- ・石沢順子, 佐々木玲子, 松寄洋子, 吉武 裕, “保育園児における日常身体活動量一歩数および活動強度による検討ー”, 第9回日本発育発達学会, 東京, 2011年3月.

(受賞)

- ・平成22年度大学体育優秀論文賞 「短期大学女子学生の踵骨強度と筋厚、皮下脂肪、および体力的指標との関連」(楠原慶子, 大森芙美子, 佐藤 文, 清水静代, 佐々木玲子, 鈴木 明), 大学体育学, 第7号, pp.13-24, 2010.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演・講師)

- ・健康運動指導士養成講習会講師, 東京, 2010年5月, 12月.
- ・日体協スポーツ指導者養成講習会講師, 東京, 2010年10月.
- ・日体協ジュニアスポーツ指導員養成講習会, 東京, 2010年10月.
- ・立教女学院短期大学附属幼稚園子育てセミナー「幼児期に動きを身につけることの大切さ」 東京, 2011年3月.
- ・東京都国立幼稚園長会課題研究部研究会講師 2010年7月.
- ・日本体育協会 子どもの発育発達段階に応じた体力向上プログラムの普及啓発実技指導者講習会講師, 高松, 福島, 新潟, 静岡, 山口, 大分, 東京, 2010年11月~2011年3月.
- ・日本学術会議公開シンポジウム「子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本指針」シンポジスト, 東京, 2011年3月.

(役職)

- ・日本体育協会スポーツ医・科学委員会委員
- ・日本体育協会指導者育成専門委員会ジュニアスポーツ指導員部会員
- ・横浜市スポーツ振興審議会委員
- ・東京体育学会理事
- ・比較舞踊学会理事
- ・日本子ども学会理事
- ・「子どもと発育発達」編集委員

- ・日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会「子どもの発達段階に応じた体力向上プログラムの普及啓発」事業における有識者会議委員、同事業協力者会議委員
- ・日本レクリエーション協会「親子元気アップ！事業」実行委員会委員
- ・笹川スポーツ研究助成選考委員会委員，同選考部会員

研究助成等

- ・“幼児における基本的運動能力と日常身体活動との関係～量および質的側面からの検討～”，文部科学省科学研究費（基盤研究C），(22500528)，140万円
- ・“日本人の基礎的動きの標準値およびデータベースの構築”，文部科学省科学研究費（基盤研究A），(21240061)，30万円，研究代表者：阿江通良（筑波大学）
- ・“幼児の運動遊びを通しての身体能力の発達と保育環境”，文部科学省科学研究費（基盤研究C），(90331511)，25万円，研究代表者：松寄洋子（埼玉学園大学）

綿田 博人【教授】

著書・論文・執筆・報告書

- ・菊池啓太，中島宣行，綿田博人，“大学野球における配球について—カウント0-0における投球の分析(2)—”，慶應義塾大学体育研究所紀要，50：53-59，2011.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・慶應義塾体育会副理事
- ・慶應義塾高等学校硬式野球部特別招聘コーチ

松田 雅之【准教授】

学会発表等

- ・松田雅之，丸田巖，“走り幅跳びにおける光電管および映像によるフィードバック効果について”，日本体育学会第61回大会，愛知，2010年9月.

石手 靖【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(研究資料)

- ・森下愛子，鳥海崇，春木孝夫，藤本秀樹，石手 靖，“学校教育における今後の水泳教育方法の検討—ニュージーランドの大学水泳関係者の意見から—”，慶應義塾大学体育研究所紀要，50：61-67，2011.

学会発表等

- ・石手 靖，須田芳正，加藤真利江，大嶽真人，“子どもの教育・発育における民間フィットネスクラブの影響に関する研究”，日本体育学会第61回大会，愛知，2010年9月.
- ・森下愛子，鳥海崇，春木孝夫，藤本秀樹，石手 靖，“学校教育における今後の水泳教育方法の検討—ニュージーランドの大学水泳関係者の意見から—”，日本水泳・水中運動学会2010年次大会，新潟，2010年11月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・早稲田大学オープン教育センター講師（非常勤），通年
- ・日本バレーボール学会理事・渉外委員長
- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事
- ・横浜ビーチバレーボール連盟理事
- ・大学ライフスポーツ教育学会理事
- ・塾体育会副理事

研究助成等

- ・“塾生に対するこれからの水泳教育方法の検討 ―水泳教育先進国との比較研究”，平成22年度福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金，73.5万円。
- ・“早慶体育授業「バレーボール」クラス交流試合の開催”，調整予算（日吉）プロジェクト事業，13.8万円。

村山 光義【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・加藤大仁，村山光義，須田芳正，村松憲，“学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討―一般性自己効力感，社会的スキルの変化に着目して―”，慶應義塾大学体育研究所紀要，50：9-22，2011.

学会発表等

- ・Murayama M, Tokuno H, Uchiyama T, Yoneda T, “Application of a contact-type muscle hardness meter during fatiguing muscle contraction” 15th Annual congress of the European College of Sport Science, Turkey, 2010.6.
- ・Yoneda, T., Suda, Y., Kito, T., Kano, M., Hamano, M., Hirotsu, N., Murayama M, “Muscle activities of fall-landing movement with or no prediction” 15th Annual congress of the European College of Sport Science, Turkey, 2010.6.
- ・吉田泰将，村山光義，加藤幸司，植田史生，内山孝憲，鈴木文菜“加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み（その4）” 第43回日本武道学会，大阪，2010年9月。
- ・Murayama M, Ishide Y, Ueda F, Oshiro T, “Effect of Laser Irradiation on Recovery from Exercise-Induced Skeletal Muscle Fatigue in Humans” 13th Asian Pacific Association for Laser Medicine & Surgery (APALMS), Nagano, 2010. 10.
- ・村山光義 “低反応レーザー照射と筋硬度変化から見るスポーツコンディショニング” 第14回日本レーザー・スポーツ医科学学会，東京，2010年12月。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・村山光義，“筋硬度計測によるスポーツ医学的研究” 文部科学省主催自立教科等担当教員講習会（理学療法）講師・講演，慶應義塾大学（横浜），2010.8.

(講師)

- ・明治大学 スキー実習 講師，菅平高原スキー場，2011.2.
- ・順天堂大学 スキー実習 講師，蔵王温泉スキー場，2011.2.
- ・北里大学 スキー実習 講師，菅平高原スキー場，2011.2.

(役職)

- ・社団法人全国大学体育連合 運営委員（総務部副部長）
- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会 事務局代表

当年中の研究教育活動の概要

平成22年度は、筋硬度評価に関するこれまでの研究成果のまとめと、そのレーザー医科学への応用に関する報告を行うとともに、あらたに大学体育教育の在り方について検討する取り組みを始めた。具体的には、研究所内将来構想委員会において研究プロジェクトを立ち上げ、学生の成長に寄与する授業展開の検討にむけ、自己効力感・社会的スキルの変化に関する調査研究を進めた。

山内 賢【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(実践研究)

- ・山内 賢，“高齢者を対象にした歩行運動専用ポール導入による体力維持・向上の可能性（2）”，慶應義塾大学体育研究所紀要，50：53-59，2011.

学会発表等

- ・山内 賢, 田村浩志, 大下聖治, 荻田 亮, 市河勉 “ポール・ウォーキングに関する基礎的研究—介護予防運動への活用を目指して—”, 日本体育学会第61回大会, 愛知, 2010年9月.
- ・大下聖治, 山内 賢, 田村浩志, 市河 勉 “高齢者が行うポール・ウォーキングに関する事例的研究—島しょ地域での活用を目指して—”, 日本体育学会第61回大会, 愛知, 2010年9月.
- ・田村浩志, 山内 賢, ラウ優紀子, 大下聖治, “高齢者が行うポール・ウォーキングに関する事例的研究—N島での運動プログラムの実態調査—”, 第65回日本体力医学会大会, 千葉, 2011年9月.
- ・山内 賢, ラウ由紀子, 田村浩志, 市河勉, 大下聖治, “高齢者の運動に効果的なケアシステムの開発—携帯情報端末を利用した動作学習の可能性—” 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2010年10月.
- ・井澤玲奈, ウラ優紀子, 山内 賢, “虚弱高齢者のための合成映像を用いた教材作成と評価—歩行能力の維持・向上を目指して—”, 第15回日本老年看護学会学術集会, 群馬, 2010年11月.
- ・Lau Y, Yamauchi K, Ogita A, Oshita S, Ichikawa T, Izawa R, Tamura H, “Development of Care System to Activate Frail Older Adults’ Activities in Daily Life: III . Effectiveness of Exercise by Synthetic Techniques of Chroma-Key” The Gerontological Society of America 63rd Annual Scientific Meeting, New Orleans, USA, 2010, 11.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・大学体育連合大学体育評価審査委員 通年

(講師)

- ・山内 賢, 「ストックウォーキング体験会」, 新島村健康づくり推進協議会, 東京都新島村さわやか健康センター, 2011年1月30日.
- ・山内 賢, 「ストックウォーキング体験会」, 新島村健康づくり推進協議会, 東京都新島村さわやか健康センター, 2011年3月26日.

当年中の研究教育活動の概要

高齢者が自宅で安心して暮らしていくためには、セルフケア能力を維持することが一番である。そのためには、高齢者に対して、自己の生活活動能力に合った運動実施と継続をよびかけ、介護状態にならないように、自発的で楽しい身体活動のプログラムを構築する必要があると考えられる。近年の研究テーマは、高齢者が安全に行える運動プログラムの創造である。本年度は、「①フィットネスウォーキングとしてのノルディック・ウォーキングとポール・ウォーキングを高齢者が行う場合の運動処方」、「②合成映像の環境を利用して運動を観察する方法の意匠」の研究課題に挑戦した。①については、2つのフィットネスウォーキングを高齢者に運動処方する場合に注意すべき点を模索し、体力レベルに応じた使い分けの必要性をまとめた。②については、運動効果を比較する情報技術として2つの動画を1画面に合成する方法を提案し、次の段階としては、学習者の2画面合成による学習体験談を聴取し、動作比較も合わせた運動学としての考察と検証を試みる。

吉田 泰将【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(執筆)

- ・日本武道学会剣道専門分科会, “剣道を知る事典”, (株)東京堂出版, p.42-43, p.54-55, 2010.
- ・剣道時代6月号, “特集ざばり攻撃返し胴で勝つ”, (株)体育とスポーツ出版社, p.48-49, 2009.

学会発表等

- ・吉田泰将, 植田史生, 村山光義, 加藤幸司, 内山孝憲, 鈴木文菜, “加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み(その4)”, 日本武道学会第43回大会, 東京, 2010年9月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・財団法人全日本学校剣道連盟 常務理事 通年

- ・財団法人全日本剣道連盟 社会体育指導員養成講習会 講師 通年
- ・全日本学生剣道連盟総務委員会委員 通年
- ・全日本学生剣道連盟・関東学生剣道連盟 審判員 通年
- ・全日本学連剣友会事務局長 通年
- ・関東学連剣友連合会理事長 通年
- ・慶應義塾体育会剣道部（三田剣友会）副師範 通年
- ・慶應義塾大学医学部体育会剣道部 師範代行 通年

(資格)

- ・財団法人 全日本剣道連盟 剣道教士八段

当年中の研究教育活動の概要

スポーツ技術向上に寄与する指導プログラムの開発を課題として、加速度センサを用いた剣道竹刀の素振りスピード評価システムと映像の即時フィードバックによる技術指導の効果について検討を行った。

加藤 大仁【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・加藤大仁, 村山光義, 須田芳正, 村松憲, “学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討—一般性自己効力感, 社会的スキルの変化に着目して—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 50: 9-22, 2011.

(訳書)

- ・ジョン・クレッセ, リチャード・ジャブロンスキー著, 加藤大仁, 木村和宏訳 “バスケットボール アタッキング・ゾーンディフェンス” 大修館書店 2010年.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

日本体育協会公認スポーツ指導員養成講習会専門科目（バスケットボール）講師, 埼玉県上尾市スポーツ研修センター, 2010年10月.

板垣 悦子【准教授】

学会発表等

- ・板垣悦子, 木林弥生 “健康づくりに役立つ運動 DVD の検証”, 日本セルフメディケーション学会, 大阪, 2010年10月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・公開講座水泳教室, 日吉キャンパス協生館プール, 2010年7月.

(フィールドワーク)

“健康づくり教室” 講師: 2010年4月~8月 (月1回), 2010年9月~2011年1月 (月1回), 東京都港区.

当年中の研究教育活動の概要

本年度も昨年に引き続き「健康教室」を開催し、「ヘルスプロモーション支援プログラム構築」のための基礎調査として受講生へのアンケートによる運動習慣実態調査、体力、基本健康検査測定を実施、個人プログラムを作成し、実施させた。

野口 和行【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・野口和行, “米国における障害者を対象とした野外教育”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 50: 23-32. 2011.

- ・野口和行, “アメリカにおける森林や身近な自然を利用した教育プログラム—ノースカロライナ州の事例を中心に—”, 野外教育情報, 19: 82-90, 2010.

(執筆)

- ・野口和行, “自然体験活動の情報—アメリカのキャンプ指導者はITも好き?—”, キャンピング, 137: 10-11, 2010.

当年中の研究教育活動の概要

塾派遣留学で米国に滞在し, 大学生を対象とした冒険教育プログラム, 障害者を対象とした野外教育プログラムに関する研究, 研修を行った。

須田 芳正【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・Suda Y, Yamai K, Umeda T, Takahashi I, Matsuzaki M, Danjo K, Totsuka M, Nakaji S, “Effect of 2 Hour Training on the Appearance of Physical and Mental Fatigue in Professional Soccer Players” Journal of Physical Fitness, Nutrition and Immunology, 20: 11-20, 2010.
- ・加藤大仁, 村山光義, 須田芳正, 村松 憲, “学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討—一般性自己効力感, 社会的スキルの変化に着目して—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 50: 9-22, 2011.

学会発表等

- ・須田芳正, “サッカー競技における得点傾向に関する研究”, 日本体育学会第61回大会, 愛知, 2010年9月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・Suda Y, “The growth history of modern Japanese football”, ‘World Together Day’ Commemoration International Forum, Kyunggi-do Korea, 2010. 10.

研究助成等

- ・“サッカーにおける一貫教育プログラムの比較研究”, 慶應義塾学事振興資金, 30万円.

村松 憲【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・村松 憲, 池田 亮, 高橋仁大, 道上静香, 岩嶋孝夫, 梅林 薫, “世界ランキング50位以内のテニスプレーヤーの国際大会におけるサービス回転量について”, スポーツパフォーマンス研究, 2: 220-232, 2010.
- ・加藤大仁, 村山光義, 須田芳正, 村松 憲, “学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討—一般性自己効力感, 社会的スキルの変化に着目して—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 50: 9-22, 2011.
- ・小屋菜穂子, 梅林 薫, 北村 哲, 村松 憲, 井上直子, “ナショナルジュニアテニス選手に適した体力測定項目の検討”, 同志社スポーツ健康科学, 3: 6-13, 2011.

学会発表等

- ・村松 憲, 池田 亮, 高橋仁大, 道上静香, 岩嶋孝夫, 梅林 薫, “テニスの国際大会におけるサービスの回転量測定について: 世界ランキング50位以内の男子選手を対象に”, 日本体育学会第61回大会, 愛知, 2010年9月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(フィールドワーク)

- ・(財)日本オリンピック委員会強化スタッフ (情報・戦略スタッフ), 通年
- ・(財)日本オリンピック委員会強化スタッフ (医・科学スタッフ), 通年

- ・(財)日本テニス協会強化本部ナショナルチーム・テクニカル・サイエンスサポート (テクニカル部会長), 通年
- ・日本テニス学会運営委員 (審査担当兼編集委員), 通年
- ・慶應義塾大学ア式蹴球保存会会長, 通年

当年中の研究教育活動の概要

昨年度に引き続き、試合映像を用いた戦術分析、ハイスピードカメラを用いたフォーム分析などを行い、体育会庭球部・卓球部の競技力向上をはかる試みを行った。また、日本テニス協会ナショナルチームのテクニカル・サイエンスサポートとして、世界トップレベル選手のフォームを撮影し、回転量について研究を続けている。世界トップ選手のサービス回転量についての論文が、学会誌に掲載された。

鳥海 崇【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・鳥海 崇, 森下愛子, “大学水球部員の巻き足動作の運動学的分析”, 体育研究所紀要, 第50巻1号: pp33-39, 2011.

(研究資料)

- ・森下愛子, 鳥海 崇, 春木孝夫, 藤本秀樹, 石手 靖, “学校教育における今後の水泳教育方法の検討—ニュージーランドの大学関係者の意見から—”, 体育研究所紀要, 第50巻1号: pp61-67, 2011.

学会発表等

- ・森下愛子, 鳥海 崇, 春木孝夫, 藤本秀樹, 石手 靖, “学校教育における今後の水泳教育方法の検討”, 第14回水泳・水中運動学会, 新潟, 2010年11月.
- ・鳥海 崇, 森下愛子, “水球競技における巻き足動作の運動学的研究”, 第14回水泳・水中運動学会, 新潟, 2010年11月.
- ・鳥海 崇, 森下愛子, “大学水球部員の巻き足動作の運動学的研究”, 第23回日本トレーニング科学会, 福岡, 2010年12月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・板垣悦子, 鳥海 崇, 森下愛子, 加藤慶一, “公開講座”, 水泳教室, 日吉キャンパス協生館プール, 2010年7月.

研究助成等

- ・“塾生皆泳が与えた教育的効果についての調査・研究”, 平成22年度慶應義塾学事振興資金による研究補助, 300千円.
- ・“塾生に対するこれからの水泳教育方法の検討—水泳教育先進国との比較研究—”, 平成22年度福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金, 735千円, 研究代表者: 石手 靖.

当年中の研究教育活動の概要

2010年度は体育研究所での研究、教育活動の2年目である。

研究活動については前年度に引き続き、大学における水泳教育の理念や方法についての検討を目的とし、ニュージーランドのオークランド大学にて視察を行った。その結果を第14回水中水泳運動学会にて報告し、体育研究所紀要にまとめた。今後はこれまでの研究内容を教育活動へと実践していく。また、当年より体育研究所所有の水中モニターシステムを用いて水球選手の巻き足動作の動作分析を開始した。こちらも第14回水泳水中運動学会および第23回日本トレーニング科学会にて報告し、体育研究所紀要にまとめた。今後はこれらの内容を深化させ国際会議での発表及び国際誌への投稿を進めていきたい。

教育活動については2010年度より公開講座として水泳教室を実施した。2011年度は慶應義塾未来先導基金による「危機管理能力と意思決定を養うための総合的水泳教育プログラム」に採択され、これまでの研究内容を生かした独自の教育プログラムとして一貫校を対象の中心とした水泳教室の開催を予定している。

加藤 幸司【専任講師(有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・加藤幸司, “バドミントン・シングルスของเกม分析—時間的要素からの分析”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 50:1-8, 2011.

学会発表等

- ・吉田泰将, 村山光義, 加藤幸司, 植田史生, 内山孝憲, 鈴木文菜, “加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み(その3)”, 日本武道学会第42回大会, 大阪, 2010年8月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・平成22年度 財団法人日本体育協会公認スポーツ指導員養成講習会(専門科目バドミントン), 神奈川, 2010年8月.
- ・平成22年度 財団法人日本体育協会公認コーチ養成講習会後期専門科目(バドミントン), 茨城, 2011年1月.
- ・第2回大学体育連合指導者養成研修会(バドミントン), 東京, 2011年3月.

(役職)

- ・慶應義塾大学体育会バドミントン部ヘッドコーチ

奥山 静代【専任講師(有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・大森芙美子, 奥山静代, 村岡慈歩, 森 曜生, 鈴木早紀子, 水村真由美, 加賀谷淳子, “最大位までの多段階ストレッチングが筋の循環に与える影響” 脈管学, 50:483-488. 2010.

(受賞)

- ・平成22年度大学体育優秀論文賞 “短期大学女子学生の踵骨強度と筋厚、皮下脂肪、および体力的指標との関連”(楠原慶子, 大森芙美子, 佐藤 文, 清水静代, 佐々木玲子, 鈴木 明), 大学体育学, 7: pp.13-24, 2010.

学会発表等

- ・Okuyama S, Muraoka Y, Nakamura F, Kagaya A, “Relationship between blood flow velocity and blood pressure during static handgrip exercise in elderly women” International Academy of Sportology, Tokyo, 2011.3.

森下 愛子【助教(有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・鳥海 崇, 森下愛子, “大学水球部員の巻き足動作の運動学的分析”, 体育研究紀要, 第50巻1号: pp33-39, 2011.

(研究資料)

- ・森下愛子, 鳥海 崇, 春木孝夫, 藤本秀樹, 石手 靖, “学校教育における今後の水泳教育方法の検討—ニュージージーランドの大学関係者の意見から—”, 体育研究紀要, 第50巻1号: pp61-67, 2011.

学会発表等

- ・森下愛子, 鳥海 崇, 春木孝夫, 藤本秀樹, 石手 靖, “学校教育における今後の水泳教育方法の検討”, 第14回水泳・水中運動学会, 新潟医療福祉大学, 2010年11月.
- ・鳥海 崇, 森下愛子, “水球競技における巻き足動作の運動学的研究”, 第14回水泳・水中運動学会, 新潟医療福祉大学, 2010年11月.
- ・鳥海 崇, 森下愛子, “大学水球部員の巻き足動作の運動学的研究”, 第23回日本トレーニング科学会, 福岡大学, 2010年12月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・板垣悦子, 鳥海 崇, 森下愛子, 加藤慶一, “公開講座”, 水泳教室, 日吉キャンパス協生館プール, 2010. 7. 10～11.
- ・森下愛子, “体育実技 水泳”, 集中講義, 学校法人洗足学園音楽大学, 2010. 8. 23～26.

研究助成等

- ・“塾生に対するこれからの水泳教育方法の検討—水泳教育先進国との比較研究—”, 平成22年度福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金, 735千円, 研究代表者: 石手 靖.

当年中の研究教育活動の概要

本年度は, 研究助成の援助を受け, 水泳教育に関する研究プロジェクトの一員として国際的な研究活動に携わることができた。競技としての水泳だけでなく, 水泳全般に関する研究教育活動ができた一年だった。本年度の経験を2011年度の慶應義塾創立150年記念未来先導プログラムにおいて, 塾内外の方々に発信していきたいと思う。

また, 昨年度に続き授業において「水中モニターシステム」の導入を試みたところ, 多くの好評を得ることができた。2011年度では, この「水中モニターシステム」を用いて水泳学習支援プログラムを開発していきたい。

2. 所内定例研究会発表会要旨

第1回 4月27日

石手 靖

子どもの教育・発達における地域スポーツクラブの影響に関する研究

〈はじめに〉スポーツを通じた教育において、いかに子どもたちが育ち、成長していくのかは非常に興味深い。近年、地域スポーツクラブに通う児童および生徒の数は増加傾向にあるが、果たして保護者は何を期待して子どもたちを通わせているのか。

〈方法〉2008年9月～10月にかけてJリーグ下部組織のサッカースクールに通わせる保護者592名を対象に、サッカースクールにおけるスポーツ活動への期待に関する質問紙によるアンケート調査を実施し、統計処理(SPSS15.0J for Windows)した。

〈結果・考察〉因子分析の結果、「精神的・身体的成長」、「サッカーの技術・戦術」、「将来展望」の3因子が明らかになった。その因子を子どもの年齢別に比較すると、「精神的・身体的成長」では、幼児～小学校（低学年）～小学校（高学年）と年齢が上がるにつれて期待感が低下していることが明らかになった。一方、「サッカーの技術・戦術」と「将来展望」に関しては、年齢が上がるにつれて保護者の抱く期待感も高くなることが明らかとなった。さらに、この2因子に関しては、統計的に有意な差が認められた。

〈まとめ〉保護者の期待は子どもの年齢に応じて違いがあることが示唆され、幼児においては心と身体の成長に対する期待が高く、学年が上がるにしたがって技術的・戦術的および将来の展望への関心が高まる傾向が窺えた。本調査においては、サッカースクールに存在意義が示唆され、そこで実施される指導は各々に適した方法が必要であると考えられる。今後は長期的な視野で子どもたちのスポーツ教育のあり方を検討し、スポーツを好

きにさせ、身体を動かし感情表現を豊かにすることが教育的にも肝要と考える。

第1回 4月27日

村松 憲（浅野基金研究補助による研究成果報告）

テニスにおけるサービスの回転量について—世界ランキング50位以内の男子選手を対象に—

テニスの国際大会である、「楽天ジャパンオープンテニス2009」において、デジタルハイスピードカメラ（HAS-D3、ディテクト社）を用いて世界ランキング50位以内の男子選手（8名）のサービスを撮影し、ボールの回転量を測定した。その結果、

- 1st サービス、2nd サービスの回転量は平均でそれぞれ、約2200,3900RPMであった。
- 殆どの選手において、1st サービスの方が2nd サービスよりも回転量にばらつきが大きかった。
- 身長と回転量の間には顕著な関係は見られなかった。
- 身長が高い選手の方が、1st サービスの回転量に変化を多く与えている傾向があった。
- 測定の再現性は、現場に有用なデータを得る、という観点からは十分に高いと考えられる。

これらの知見はこれまで殆ど得られておらず、テニスの指導現場に役立つと考えられる。また本研究の限界として、

- 各選手のデータ数が少なく、平均値をとって一般化する際には注意が必要である
- 回転軸の角度を測定していないため、球種と回転量の関係を調べるのが困難であるという点が考えられる。

本研究は、この研究会後投稿した「スポーツパフォーマンス研究」に掲載された。

第2回 5月25日

研究委員会企画1 体育研究所懇談会

<体育研究所に必要な活動とは>—長谷山常任理事をお招きして—

体育研究所懇談会として長谷山彰常任理事をお招きして、「体育研究所に必要な活動とは」をテーマに懇談会を開催した。まず初めに長谷山常任理事より“体育研究所への期待—教育か研究か—”についてのお話がなされ、「研究に奥行きのない教育は学生を惹きつけることができない」、「教育のない研究は学門を次世代に伝えることができない」など「教育と研究は一体のものである」等のお考えや意見を拝聴した。その後以下4つのテーマについて懇談を行った。

- ① 体育研究所は、どのような研究を、どのように行うべきだろうか？
- ② 体育研究所が学術論文などの研究業績をあげることはどのくらい重要か？
- ③ 全ての体育研究所所員が研究を行い、研究業績をあげるべきだろうか？
- ④ 各所員の活動は、授業や研究の他に、スポーツ振興、体育会支援、塾外体育・スポーツ団体での活動など様々であるが、「研究業績を生みやすい活動」と「研究業績を生みにくい活動」の優先順位をどのように考えるか？

大学教員として学術論文などの研究業績をあげることはすべての教員において重要である一方で、体育研究所がおこなっている多種多様な幅広い教育、活動をどのようにして業績として積み上げていくか、ということが懇談の主な論点となり、この点については引き続き体育研究所所員における今後の課題となった。

第3回 6月29日

村山 光義

筋硬度計測による発揮筋力の推定

一般に骨格筋は収縮時に短縮し、その「硬

さ」を増す。筋内では収縮強度の高まりに比例して筋内圧が上昇することが知られており、こうした変化が生体表面に表出していると考えられる。本研究では筋硬度の変化を捉えることで収縮力を推定する方法を検討した。運動中に計測可能な筋硬度評価方法の基礎的検討として、薄型圧力センサに突起を取り付けた小型筋硬度センサを皮膚表面に貼り付け、生体側の反力を計測するシステムを開発した。このシステムは生体表面に密着し、リアルタイムで筋内圧変化による硬度計測が可能という利点をもつ。そこで、密着型筋硬度計測装置の有効性を検証するため、①随意的な等尺性筋収縮力発揮時における、従来型押し込み式筋硬度評価との比較、②反復性の疲労運動の前後における発揮筋力と密着型筋硬度計測値の関係、について検討を行った。

①の検討の結果、上腕二頭筋における肘屈曲動作における筋収縮強度の高まりに対し、密着型・押し込み式のいずれも筋硬度が増加する比例関係が得られ、筋硬度から筋収縮力を推定可能であることを確認できた。さらに、密着式による筋硬度は発揮筋力レベルと $r=0.856$ の高い直線関係が見られ、従来の押し込み式の筋硬度評価よりも高い直線性を示した。この点は、本研究で開発した密着式筋硬度センサの有効性を示すものと考えられた。

②の検討においては、前腕屈筋群に密着型装置を固定し、ハンドグリップ動作を80% Maximal Voluntary Contraction (MVC) を目標に、50%MVCに低下するまで反復した。その後10分間疲労から回復する過程にMVCを計測し、疲労前の状況と比較した。疲労前(安静時)の%MVCと筋硬度の関係には有意な直線関係が認められたが、①の上腕二頭筋と比較して、筋硬度の分布が低値に移動した。一方、疲労後の回復過程では、%MVCに対して、筋硬度が大幅に高値を示す結果となった。疲労前の筋硬度の分布が低値を示し

た理由として、ハンドグリップ動作の主働筋が前腕の深部に位置し、センサを密着させた表面の筋は共働筋であったため、相対的に筋硬度変化の感度が低下した可能性が考えられた。また、疲労後の筋硬度の増大には運動性充血による血流増加が強く影響したと考えられた。

第3回 6月29日

山内 賢

高齢者がストックを用いた歩行運動を行った場合のお話し

高齢者にとって「寝たきり」になる原因の事例として最も多いのは、転倒である。その要因としては、環境によるもの、健康関連体力の低下によるものが考えられる。環境に関しては整備に尽きるが、体力低下に関しては、トレーニングの必要性があり、特にバランス能力（転倒しそうになってもうまく適応できる能力）を鍛えることが重要となる。バランス能力には静的なものと動的なものがあるが、転倒は動いているときに起こることが多く、動的なバランス能力を身につけることにより、予防することができる。歩行運動は、動的バランス機能の向上を目指した運動処方（歩行運動プログラム）において、最も身近なものと考えられるので、高齢者の歩行能力の向上に大いに貢献する。本報告では歩行運動プログラムの中でも、ノルディック・ウォーキング（NDW）と称する、エクササイズを紹介し、その効果を報告する。

近年、歩行専用デザインされたストックを用いたウォーキングエクササイズが、「健康スポーツとしての効果がある」との認識の下、街中で見かけるようになった。これは、ノルディック・ウォーキングとも言われていて、ノルデックスキー選手が夏場のトレーニングに用いていたことなどがきっかけで、フィンランドで考案され一般市民に普及したエクササイズである。そして、最も普及して

いる国がフィンランドであり、世界での愛好者は推計800万人と言われている（INWA報告）。フィンランド語ではサーバ・カベヴェー（Sauvakavely）と言うが、直訳するとストック・ウォーキング（SW）になる。これまでにSWにおける生理学的研究はいくつかなされており、ノーマル・ウォーキング（通常歩行：OW）と比べて同一速度で歩いた場合よりも全身の筋肉を動因させ、運動強度を増加させる知見がある。「エネルギー消費から見た運動効果はOWに比べて1.2倍」、「4点支持による歩行は膝関節への負担軽減」という報告があり、日本では、心臓病のリハビリとして普及しようという動きが見られる。このようにポールを用いた歩行運動による適度な運動刺激は、普段あまり使わない筋肉を刺激して歩行調整にかかわる機能を高めるので、虚弱高齢者を対象にした転倒予防や全身の運動に関する援助にも有効であると考えられる。

【事例報告】

1か月間、高齢者（女性13名、男性5名の計18名、平均年齢：男性69.8歳±4.40、女性64.0歳±7.04、全体平均年齢65.6歳±6.84）にNDWを行ってもらった。

第3回 6月29日

加藤 大仁

スポーツ政策のアクターについて

日本体育・スポーツ政策学会で、スポーツ政策のテキストを作ることになり、「スポーツ政策のアクター」という一節の執筆を担当することになった。自然科学とは異なり、社会科学では、ミクロ経済学など一部の分野を除いてスタンダードなテキストが存在しないというのが現状である。そのため、テキストといっても、書き手によってかなり内容の異なるものになる可能性が高い。また執筆する側にとっては、基礎概念を再度見つめ直す、極めて貴重な機会となることが多いようである。

ところで、政策が作り上げていく過程においては、様々な「人」や「組織」が重要な役割を果たす。すなわち、ある時は政治家や官僚、ある時は利益集団などが、所与の制度的条件の下で、様々な議論や交渉を積み重ねながら、政策を作り出していくのである。政治学や政策科学では、このような人や組織を「アクター」と読んでいく。

アクターにアプローチする際には、指導者のリーダーシップに着目する方法や、アクター間のネットワークに着目する方法、合理的選択理論による分析など、様々な手法が考えられる。今回執筆を担当した節では、これらの手法について詳述することはできなかったが、アプローチの手法それ自体も、政治学や政策科学では重要な研究テーマとなっている。

では現実の政策過程に登場するアクターには、どのようなものが挙げられるだろうか。恐らく真っ先に思い浮かぶのは、政治家や官僚などであろう。他にも政策思考を同じくする政治家の集まりとしての政党や議員連盟、利益集団やマス・メディアなども代表的なアクターである。また場合によっては地域住民や外国政府なども、政策の形成過程で影響を及ぼすべく活動を行うことがある。

何れにせよ、政策の形成過程でどのようなアクターが登場してくるのかは、政策課題によって違ってくる。スポーツ政策に関する研究を進めていく際にも、登場するアクターや政策過程のパターンの違いをしっかりと見極める必要があるといえよう。

第4回 7月20日

研究委員会企画2

慶應義塾幼稚舎 藤本秀樹先生

水を楽しむ（着衣水泳実習）

藤本氏は、国内で唯一となる着衣泳により博士の学位を取得している専門家である。まず藤本氏による配布資料の説明が行われた。

資料によれば、前日までの3連休に水難事故で12名もの人が亡くなったことが紹介され、水難事故がどこでも起きうる事故であることが紹介された。また、日本における水難事故死者数は、先進国29ヶ国中最多であり、水難事故をいかに回避するかが重要であることが示された。さらに我が国における水難事故の特徴として、海や川等の自然環境下での発生率が高いこと、さらに釣りや水遊び等水着以外の服装（着衣泳状態）での発生率が高いことが示された。さらに、所員の実演による着衣泳の様子が示された。これによると、着衣泳状態では、水着状態に比べ浮力があるが、水着状態でよく用いられるクロール等の泳法よりも、エレメンタリーバックストロークと呼ばれる初歩的な泳法の方が適している事が示された。続いて、着衣泳の自習が行われた。最初は着衣泳状態でのクロール、バタフライが行われた。25mを泳ぐのも、精一杯であることが感じ取れた。続いて、着衣泳状態で、エレメンタリーバックストロークを行った。最初は不慣れな者も多かったが、次第に楽に速く泳げることが、実感されたようである。最後に藤本氏による、レインコート用いた側席浮輪の作り方を実演していただいた。レインコートの足の部分を縛り、そこに空気を入れることで、浮輪を作ることができた。その浮力は非常に強く大人も簡単に浮けることが示された。最後に、質疑が行われ、自然環境下で人が溺れた場合、助けに行くべきかどうかについての議論が行われた。

実習参加者の感想は、着衣状態で泳ぐことが、水着状態での水泳とはいかに異なるかがよくわかった、というものが多かった。さらに、自然環境下で人がおぼれた場合に、助けられる自信がなくなった。というものも多かった。これからの水泳シーズンにおいて、我が体育研究所として、着衣泳の普及を行うことは、非常に重要であるということが、藤本先生からのコメントであった。

第5回 10月5日

鳥海 崇

大学水球部員の巻き足動作の運動学的分析

平成21年度調整予算で購入した水中モニターシステムを利用し、大学水球部員による巻き足の動作分析を行った。

巻き足動作は水球やシンクロナイズドスイミング、水難救助などにおいて、水中で静止、浮上する際の基礎動作として用いられる。特に水球競技においては競技の性質上、足のつかないプールにおいて約1時間の競技時間中は浮くだけでなく位置争いも含めて常に巻き足動作をする必要があり、その技術により体力消耗度が大きく異なってくるため特に重要である。

しかしながら巻き足動作は水面上からは行為者・指導者ともに水中の動作が視認できず、それゆえ巻き足指導も指導者による経験を基にした指導に頼っているのが現状である。

近年、シンクロナイズドスイミング競技では、水中カメラを用いた巻き足の技術評価方法を確立した(M. Hommma & M. Homma, 2005)。M. Hommma & M. Homma (2005)によると巻き足動作で技術評価が高いグループは両膝の位置が水面に近い位置に保持されている(いわゆる「膝が高い」状態である)ことと、両踵の位置も水面に近い位置に保持されていることが指摘されている。しかしながらこれらの評価基準が、競技時間やその特性が大きく異なる水球競技にも当てはまるかについては不明な点が多い。

そこで本研究では、M. Hommma & M. Homma (2005)によるシンクロナイズドスイミング競技で得られた評価基準が水球競技においても当てはまるか否かについて調べる目的で、大学水球部員10名による巻き足の動作分析を行った。

測定は慶應義塾大学協生館プールにて行い、測定方法はM. Hommma & M. Homma (2005)に準拠した。

従来の水球競技で用いられている巻き足能力の判断基準である20kgの巻き足の支重時間と両膝の位置とを比較したところ、おおよそ関係性があることがわかった。しかしながら支重時間と両踵の位置との比較では相関がみられなかった。また、全被験者について両膝の位置(最大高さ)に左右差が生じており、この影響や原因として考えられる下肢及び股関節の柔軟性について調査することが今後の課題として指摘された。

第5回 10月5日

森下 愛子

学校教育における今後の水泳教育方法の検討—ニュージーランドの大学水泳関係者の意見から—

平成22年度福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金の援助を受け、8月10日～20日にニュージーランド(オークランド)にて、ニュージーランドの安全水泳教育に関わる諸施設(オークランド大学教育学部, Water Safe Auckland Inc., Surf Life Saving Northern Region, Coastguard Service/Maritime Police)を訪問し、ニュージーランドにおける安全水泳、水難事故防止を推進する中心的組織であるオークランド大学教育学部において水泳教育の現状を調査した。

また、ケビン・モーラン博士推奨の教育行政における安全管理のとらえ方、学校教育現場における指導プログラムや指導者育成プログラムなどの実態を調査した。これらについて、我が国の水泳教育の現状と比較・検討した。

日本とニュージーランドにおける水泳教育の現状について以下に記す。

- 1) 日本と同様で海洋国家であるニュージーランドでは、自然学習が普及しており、諸学校では移動教室が年に数回実施される。
- 2) 人口の約半分が外国からの移民で構成されているため、安全水泳を学んでいない者に

水泳教室などのイベントが学校以外の企業によって実施されている。

3) 水泳教室などのイベントを実施している企業の中心的公司 (Water Safe Auckland Inc.) では、大学の先生方 (教育現場) と調査・分析をするとともに「教えるべきこと」を提示し、その結果を踏まえ「今後の水泳教育」について考えてもらうと言った「循環型の教育サイクル」で水泳教育を行っている。

4) 小学校においては保護者とともに参加し、水との安全な付き合い方を体験する2日間のプログラムを受け、生徒と保護者とで認識を共有させることも行っている。

5) 日本においては、水との付き合い方よりも技術指導に重視している。

今後の日本における学校教育での安全水泳指導を考える際、各教員の多様な安全水泳指導法を精査し、ニュージーランドのような「循環型の教育環境」を整備することが重要である。

第6回 10月26日

村山 光義

大学の体育・教育問題 ― 塾内外の現状分析から ―

昨年度 (平成21年) 10月に行った研究会発表「大学体育の課題を考える」に引き続き、大学教育・教養教育のあり方および、体育科目のあり方について、塾内外の動向を合わせて考えた。

国内における大学教育の課題とされる「学士力」「質保証」「認証評価」に加え、今年度 (平成22年) 7月には文部科学省から「スポーツ立国政策」が出された。これに対応して、9、10月には日本体育学会、全国大学体育連合がシンポジウム・講演会を開催し、その内容を概説した。さらに、全国大学体育連合が中心となり日本体育学会、日本体力医学会などの6団体から出された「体育系学術団体からの提言2010」についても概説した。大学体育は

心身の健康やコミュニケーション能力の育成に関する教育活動に一層力を注ぐとともに、その教育過程に明確な方法・内容と評価法を確立していく必要がある。

次に、塾内における教育課題に関して、「日吉カリキュラム検討委員会の発足」「日吉教育関係諸センターの動向」について情報を提供した。日吉キャンパスでは、教養教育の中核としての日吉共通科目 (総合教育科目) の再整備が進められているが、体育科目もその一端をなし、キャンパス全体・諸センターに協力する必要がある。その際、新規の学際的取組として新たな交流を模索することと塾の伝統を鑑みたスポーツ文化の創造という視点が重要であると考えられる。

まとめとして、現在、大学教育に質保証が求められ、学士力につながる教育内容を明確化していく必要がある。これは、体育科目も同様である。今年度こうした状況において、「体育系学術団体からの提言2010」が出された。その柱は、保健体育分野の質保証としての教育効果を再認識することであり、それを大学内外にアピールする必要がある。体育研究所もこうした体育教育の普遍的意義を認識し、大学教育全般を視野に入れた活動と情報の収集・議論への参加等を進めていくべきであると考えられる。

(参考文献・その他)

体育系学術団体からの提言2010 21世紀の高等教育と保健体育スポーツ 全国大学体育連合シンポジウム資料

第7回 11月30日

研究委員会企画3

慶應義塾高等学校 丸田 巖先生

慶應義塾高等学校の丸田巖先生にお願いし発表いただいた。丸田先生は慶應義塾高等学校にて競走部の部長をされており、故・松田雅之先生と共に陸上競技に関する研究を行っていた。今回は、第61回日本体育学会大会

(愛知, 2010年9月)にて, 松田先生と共同で研究発表された“走り幅跳びにおける光電管および映像によるフィードバック効果について”について報告いただいた。

走り幅跳びにおける助走スピードは, 他の跳躍種目に比べ, 記録決定への大きな要因となると考えられ, 助走中のスピード変化を把握することは記録向上の為には大変重要なことと考えられる。本研究では, 陸上跳躍選手(走り幅跳び専門)を対象として, 無線型ワイヤレス光電管システムおよびハイスピードデジタルカメラを用い, 走り幅跳びの助走スピードの変化と踏み切り前後における動作について分析を行なった。対象は7m60cmから7m90cm台の記録を持つ選手3名と, 7m前後の記録を持つ大学生3名, 6m前後の記録を持つ高校生3名であった。測定後, 数分で選手にフィードバックできる光電管システムを使い, そのデータを参考に複数のトライアルを試み, 幾つかの興味ある知見を得た。ほぼ全力で助走を行う走り幅跳びにおいて, トップスピード区間やリズムアップ等のスピード変化が瞬時にフィードバックできるシステムは, 走り幅跳びにおける効率的な助走パターンを見つけるためには効果的だと考えられた。

第8回 1月25日

吉田 泰将

中学校における武道必修化に対する剣道界の動向

発表者は, (財)全日本学校剣道連盟常務理事として, 全国剣道指導者研修会を企画・運営している。この研修会は, 平成24年度から完全実施される中学校保健体育における武道の必修化に向けて, (財)日本武道館・(財)全日本剣道連盟・(財)全日本学校剣道連盟の三者が共催の形で実施しているものである。

そこで, その背景にある教育基本法・文部科学省学習指導要領などの教育目標や地方自

治体における条件整備, 実際の授業における指導内容の工夫などを紹介した。(剣道授業指導計画)

また, 平成22年に実施された中学校武道(剣道)に関する調査の結果から, 1万校を超える中学校の実状を解説した。

(参考文献・その他)

中学校武道の必修化を踏まえた「剣道授業の展開」, (財)全日本剣道連盟, 2009.4

第8回 1月25日

加藤 大仁 (将来構想委員会)

学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討

— 一般性自己効力感, 社会的スキルの変化に着目して —

1991年, 文部省は大学設置基準の大綱化の方針を明らかにした。大綱化による影響は広範囲に及び, 多くの大学で設置されていた教養部は姿を消し, 教養科目の設置数も減少している。第二外国語を必修科目から外した大学も少なくない。保健体育科目に関していえば, 必ずしも必修科目としなくてもよいとされ, 取り扱いは大大学の裁量に任されることとなった。

慶應義塾大学でも, 従来日吉キャンパス1年次の必修科目とされていた保健体育科目は, 学部側の判断により, 選択科目とされることになった。多くの新生が, 受験準備の為に体力を低下させているということを考えると, 体育実技科目が必修から外されたデメリットは大きいといえよう。しかし, その一方で, 全学生を受け入れるために生じていた施設面の制約からは開放された。加えて, 学生が望まない種目を無理矢理履修させられるということもなくなったので, より魅力的なカリキュラム展開のチャンスともなったのである。

このように, 大学設置基準の大綱化により, 大学は様々な改革を進めてきたことは間違い

ない。にもかかわらず、大学に対する批判は収まりそうにない。2002年の『新しい時代における教養教育のあり方について』、2005年の『我が国の高等教育の将来像』、2008年の『学士課程教育の構築に向けて』と、2000年代以降になってからも、中教審が大学教育に関する答申を立て続けに行ってきた背景には、時代の変化に対応し切れない大学への苛立ちがあるのかもしれない。

体育実技の授業を通じて得られる効果については、これまで継続的に実施してきた授業アンケートでも垣間見ることができる。また、教員側も、それなりに感じるころがある。しかし、大学生活の中で、体育実技を履修することによりどのような効果が得られるのか、またそれが学生の心と身体の健康にどのような影響を及ぼすのかを明らかにしていないと、それは単なる自己満足に終わる危険性もある。

そこで、将来構想委員会では、大学生活における体育科目の意義を考える第一歩として、体育実技の授業を通じて学生の「自己効力感」と「社会的スキル」がどのように変化しているのかを調査することにした。授業の性格上、実技科目では身体能力の向上だけではなく、学生間の交流を通じて、ライフスキルの獲得も図れるはずである。実はここ数年来強く叫ばれている「学士力」の参考指針の中には、コミュニケーションスキルや、リーダーシップ、チームワークといった言葉並んでいる。つまり、自己効力感が高く自信を持って適切に行動できる、あるいは、社会的スキルに優れ、円滑な対人関係を築けるといった能力は、大学生活を通じて獲得・向上させられることが期待されているものなのである。ところで、自己効力感や社会的スキルを測定するための質問用紙はいくつか提唱されているが、今回の調査では自己効力感に関しては一般的セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)、社会的スキルに関しては KiSS-18を用いた。

加えてスポーツ・運動活動に対する意識についても調査を行った。

今回の調査に関する詳細については『慶應義塾大学体育研究所紀要』2011年1月 第50巻第1号 pp.9-22を参照して頂きたいが、春学期開始当初と春学期終了時の GSES の得点を比較すると、体育実技を履修した学生の GSES は有意な得点の上昇が認められた。他方、実技を履修していなかった者の得点には変化がなかったため、授業終了時の得点を比較すると、実技履修者の GSES のほうがそうでない者の得点より有意に高かった。このことは、体育実技の履修を通じて GSES の向上が期待できることを物語っている。

社会的スキルに関しては、実技履修者とそうでない者の間に統計的な有意差は見られなかった。今回の調査は春学期の授業期間を通じた変化をみたため、体育実技履修の有無に関わらず、半期の大学生活によって新たな友人関係の構築や、未知の授業体験等が社会的スキルを高めた可能性がある。

今回の調査は、大学体育が学生の成長にいかに関与できるかという視点から、その改善を進めるための基礎的資料を得るために行った。未だ手探り状態の面があることは否めないが、来年度は体育実技の授業でコミュニケーションをとることを強調した場合、学生の自己効力感、社会的スキルにどのような変化が現れるかを調査したいと考えている。

3. 大学体育連合中央研修会報告

参加者：佐々木玲子，奥山静代

期 間：平成22年8月25日（水）～27日（金）

会 場：浦安ブライトンホテル，味の素
ナショナルトレーニングセンター，
千葉大学西千葉キャンパス，東京
大学駒場キャンパス

1. 研修プログラム

初 日：講演，特別講演，パネルディスカッ
ション，情報交換会

2日目：実技研修会（午前・午後），実技研
修分科会

3日目：実技研修会（午前）

2. 研修内容

1. 講 演

「大学体育に関わる体育・スポーツ政策」

講 師：佐藤 豊（文部科学省スポーツ青少
年局企画体育課 教科調査官）

文部科学省では，今後の我が国のスポーツ
政策の基本的方向性を示す「スポーツ立国戦
略」の策定に向けて検討を進めてきた。この
戦略は，わが国の「新たなスポーツ文化の確
立」を目指し，

- ・人（する人，観る人，支える（育てる）人）
の重視，
- ・連携・協働の推進

を「基本的な考え方」として，それらに導か
れる今後概ね10年間で実施すべき5つの重点
戦略（①ライフステージに応じたスポーツ
機会の創造 ②世界で競い合うトップアス
リートの育成・強化 ③スポーツ界の連携・
協働による「好循環」の創出 ④透明性の
高い公平・公正なスポーツ界の実現 ⑤社
会全体でスポーツを支える基盤の整備），政
策目標，重点的に実施すべき施策や体制整備
のあり方などをパッケージとして示した広範
囲をカバーしているものと説明した。さらに，

本戦略に掲げる施策を総合的かつ積極的に推
進して，わが国の一層のスポーツ振興に取り
組むことにより，スポーツ立国の実現を目指
すとの報告された。

2. 特別講演

「大学における体育の授業に求めるもの」

講 師：國枝秀世（名古屋大学大学院理学研
究科長・理学部長）

國枝先生は，学生時代陸上競技ハンマー投
げの選手であり，現在も陸上競技部長として
7大学陸上競技大会の運営に携わり，体育・
スポーツに関しても深い理解をお持ちのこと
から，体育に直接関係が深い領域でない立場
から，体育に対するお考えや意見を拝聴する
ことができ，とても有意義な講演であった。
國枝先生は，近年の学生において，心と身体
のバランスを保つことが重要であると感じ，
保健体育の教育が重要であることを感じてい
ると述べた。また，大学体育の授業では，ス
ポーツを通じて自らの身体を知ることが大事
であり，それは人体を用いた，最も身近な自
然科学であると示した。そして，限られた経
験ではなく，事実として機能を知り，思い込
みやエセ科学の排除，正しい知識を身につけ
ることが重要であること，さらには，自らを
高めるトレーニング法を学び，健康を維持す
る方法論を学ぶことが必要であると述べた。
そして最後に，体育教員が生涯を通じて，強
い身体を作り，健康で過ごす術を学生に教え
ることが期待されると話された。

3. パネルディスカッション

國枝秀世（名古屋大学大学院理学研究科長・
理学部長）

畑 誠之助（千葉工業大学）

「大学体育の可能性を探る」というテーマ
でパネルディスカッションが行なわれた。大
学体育の役割の一つには，豊かな人間性を備
えた学生を育成することにあるが，昨今の「多

様化の時代」においても対応できる総合力を持った人間を、大学という場で、しかも体育という方法論の特徴を活かして育て上げていくことは重要な課題である。さらに、様々な資質とニーズを持った学生に対して、バリエーション豊かな指導法が指導者に求められている時代でもある。パネルディスカッションでは、指導者は学生の可能性を引き出し、そして高めることが大切であり、「多様化の時代」に対応するための一つの手段として、体育領域だけに留まらず、他領域との融合が大切であり、積極的にコミュニケーションをはかっていくことが大切であるとまとめられ、パネルディスカッションは終了した。

4. 実技指導研修会（2日目）

「能とヨーガ」

講師：ケンハラクマ（アシュタンガ・ヨガ・ジャパン）、梅若靖記（能楽師）

コーディネータ：

矢田部英正（武蔵野身体研究所）

<午前の部：ヨーガ>

ヨーガとは、古代インドに発祥した「心」と「からだ」を鍛錬する修行法である。ヨーガの語源は、牛にくびきを結ぶことの意である。そこから人間的な「精神」と野生的な「身体」とをひとつに結びつけること、ひいては自然と人間とが一体になるような境地を「ヨーガ」と呼ぶようになった。現在一般に広まりつつあるのはハタ・ヨーガの流れである。身体的な訓練を基礎におき、呼吸やポーズの訓練をかさねながら生理的な浄化をはかり、精神的にも同時に高まろうとする訓練の体系である。

アシュタンガヨガとは、およそ2500年前、ヨーガの聖者パタンジャリによって作られたと伝えられるヨーガの根本教典である。アシュトとはサンスクリット語で数字の「8」を意味し、ヨーガの練習をするにあたって、この「8技則（アシュタンガ）」を理解することが必

須となる。

1. ヤマ：他人に対して守るべき5つの行動規範
2. ニヤマ：自分に対して守るべき5つの行動規範
3. アサナ（坐法）：ポーズの練習をする
4. プラーナヤマ：呼吸をともなう「生气」のコントロール
5. プラティヤハラ（勸戒）：外界の刺激がきにならなくなる集中の状態
6. ダラーナ（凝念）：心と体のバランスを一点にまとめる集中の状態
7. ディヤーナ（静慮）：「禅」の語源、心と体が安定し「静謐」な状態が訪れる
8. サマディ（三昧）：外界の自然（宇宙）と一つになる感覚

などが説明された。

この説明を受けて、ヨガ基本といわれる「太陽礼拝」のポーズの指導を受け、実施した。「太陽礼拝」は、全身に太陽の新鮮な恵みを受け入れるイメージで、呼吸を意識しながら一連の流れを行なう動作である。

説明・指導を受けて、ヨガの歴史を学び、また時間によってヨガのポーズを変え、自分の体をいかに健康にするかということが重要であることを学んだ。

<午後の部：能>

能は、南北朝から室町時代の初期にかけて、それまでの様々な芸能、踊り、歌などが混ざり合い、能の原型のようなものができた。室町時代に観阿弥、世阿弥親子により、この原型が集大成され、歌曲や美しい舞、ストーリー性が加わり、「能」が完成した。能は型（演技等の様式、パターン）によって構成されている。型の基本は摺り足であるが、足裏を舞台面につけて踵をあげることなくすべるように歩む独特の運歩法でこれを円滑に行うためには膝を曲げ腰を入れて重心を落とした体勢をとる必要がある。すなわちこれが「構え」

である。構えを含め、梅若氏より数種類の能の型の指導を受けた。

・構え

重心を低く落として力を溜めながら立つという型である。両腕を優雅に保ち、足を開き加減にして、全身に力をみなぎらせる。

・運び

歩む動作。踵の上下運動を控え、舞台を削るように歩むすり足で前進する。

・サシ込ミ

右手を前に出し進む型。少し半身になり、1足ほどの歩幅で勢いをつけて運ぶ。扇を持った右手をやや高く正面にだす。

・ヒラキ

両手を開きながら後退する型。狭い歩幅で、両手で柔らかい曲線を描きながらしきる。左足、右足、左足と三足後退しながら、両腕を横に広げる。

わが国を代表する古典芸能として、海外からも高い評価を受け今日に至っている能の歴史について学び、型の指導を受け、日本文化の良さにふれた時間でもあった。

5. 実技指導研修会（3日目）

「コーディネーション・トレーニング」の理論と実践

講師：荒木秀夫（徳島大学）

コーディネーション理論とは、1世紀以上を遡る時代から思想的に継承されてきた。

スポーツ・運動における coordination は、医学の分野と密接につながりながら、各国で独自に発展し、今日に至っている。荒木先生が実践しているコーディネーション理論とコーディネーショントレーニングの方法は、人間（生体）の運動とともに、「身体性」や「認知」、システム科学に関わる理論などから抽出した考え方であり、それを実践的に確かめながら展開してきたものである。コーディネーショントレーニングを実践する

上で、共通した視点を一貫して意識することが重要であると荒木先生は説明した。すなわち、それは運動の発生・発達に即することであり、感覚運動統合の面から運動獲得の経過を見ること、さらには環境刺激によって運動が形成されるという特性を意識することである。様々なコーディネーション能力は、相互に密接に関わるものであるが、個々のトレーニングは、それ自体で目的を持つものであっても、トレーニングとトレーニングの組み合わせ自体にも、より大きな目的を持つものでなければならない。

以上をまとめると、コーディネーション理論は、運動発生、身体性、能の発達理論における共通項から、実践的に展開できる部分を体系化しようとするものである。そして、原理は人間の生涯を通じての「運動・認知の発達」を局面ごとに短期間に再現することにある。また大学生に対する体育としての「コーディネーション理論と実践」は、「自分の能力は、これ以下でもなければ、これ以上でもない」という意識から、「今からでも、変えられる」という確信を持たせ、方法を探る意欲を培うことを目的としていると述べた。

6. その他

平成23年度の大学体育連合中央研修会は、北海道支部の主管で8月末、倶知安町およびニセコ町にて開催予定。

Ⅲ. 教育活動記録

(教育委員会)

Ⅲ-1. 授業の実施

1. 平成22年度体育科目の履修者統計

1) 体育学講義と体育学演習

平成22年度は、体育学講義7コマ（前年と同数）、体育学演習6コマ（前年比-1コマ）を開講した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。履修者数の合計は体育学講義で149名（前年比-9%）、体育学演習で31名（前年比-51%）であった。演習は1コマ減であったが、4つの演習で履

修者数がそれぞれ一桁台、また履修者がいなかった演習もあり、演習履修者数はここ6年間で最低のレベルまで落ち込んだ。体育学演習は単位数が1単位であり、学生の履修意欲を旺盛にするものではないという声も聞かれる。今後、履修者数の減少をくい止め、回復を図るためには、演習授業内容の啓蒙や告知のみならず、開講曜日、時限等についての調査・検討も必要であろう。

表Ⅲ-1-1. 平成22年度 体育学講義のタイトル及び担当者

講義名	コマ数			担当教員	履修者数
	春	秋	計		
スポーツの効用を科学的にみる（スポーツ総論）	1		1	村山光義・佐々木玲子・吉田泰将	14
スポーツ心理学の世界	1		1	近藤明彦	26
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1		1	吉田泰将	71
スポーツの技と文化を探る	1		1	植田史生・松田雅之・村山光義	11
アウトドアを考える		1	1	村山光義	6
健康と運動の科学		1	1	近藤明彦・横山裕一・辻岡三南子・井ノ口美香子	7
現代社会とスポーツ		1	1	加藤大仁	14

表Ⅲ-1-2. 平成22年度 体育学演習のタイトル及び担当者

講義名	コマ数			担当教員	履修者数
	春	秋	計		
トレーニング演習	1		1	山内 賢	9
からだの動きをはかる（バイオメカニクス）	1		1	佐々木玲子・村山光義	3
ベーシックライフサポート（救急法の基礎）		1	1	山内 賢	10
動くからだのしくみ		1	1	奥山静代・佐々木玲子	0
テニスを更に楽しもう		1	1	村松 憲	5
バドミントンを科学する		1	1	加藤幸司	4

2) 体育実技 A・B

表Ⅲ-1-3に体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）の担当者それぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4に体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）の種目別履修状況を

示す。表Ⅲ-1-4に示すように、日吉・三田合計で6165名の申し込み（前年比-1.3%）に対し、最終的に5825名の履修者（前年比+3%）となった。定員に対する充足率は、全体で65%となり、前年を9%程下回った。

表Ⅲ-1-3. 平成22年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種目
教 授	近藤 明彦	ウォーキングエクササイズ, ジョギング, 陸上競技, 体力UPコース
〃	安藤 勝英	柔道
〃	佐々木 玲子	エアロビクス
〃	植田 史生	剣道
〃	綿田 博人	野球, ゴルフ
准 教 授	松田 雅之	陸上競技, ジョギング, 卓球, 体力UPコース
〃	石手 靖	バレーボール (B)
〃	村山 光義	バレーボール (A, B), フライングディスク, ニュースポーツ (B)
〃	山内 賢	ハンドボール, 体力UPコース
〃	吉田 泰将	剣道
〃	加藤 大仁	バスケットボール
〃	板垣 悦子	アクアエクササイズ, ボディメイクエクササイズ
専 任 講 師	野口 和行	
〃	須田 芳正	サッカー, フットサル
〃	村松 憲	テニス
〃	鳥海 崇	水泳
専任講師(有期)	加藤 幸司	バドミントン, ニュースポーツ
〃	奥山 静代	エアロビクス, バレーボール
助 教(有期)	森下 愛子	水泳
非 常 勤 講 師	李 宇譔	サッカー
〃	石渡 千草	ソフトボール
〃	岩崎 陸	サッカー
〃	織戸 晃	軟式野球
〃	勝部 知子	ダンス
〃	勝又 正浩	ゴルフ
〃	加藤 大雄	テニス
〃	加藤 真利江	バレーボール
〃	鷲見 全弘	水泳
〃	加藤 慶一	水泳
〃	川西 大介	アーチェリー
〃	川井 明	バスケットボール
〃	菊地 啓太	野球
〃	木林 弥生	卓球
〃	木塚 孝幸	バスケットボール
〃	河乃 建仁	気功
〃	坂井 利彰	テニス
〃	坂本 純子	テニス
〃	島田 桂太郎	ボクシング
〃	杉本 亮子	ボディーコンディショニング (ヨガ&ピラティス)
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	田中由美子	フェンシング
〃	円谷 洋一	弓術
〃	藤平 信一	合気道
〃	袴田 智子	バスケットボール
〃	原 莊 太郎	テニス
〃	平井 克英	バドミントン
〃	平野 泰宏	バドミントン
〃	堀場 雅彦	テニス
〃	槇野 陽介	体力UPコース
〃	松本 健太郎	テニス
〃	松山 保幸	自動車
〃	矢作 拓也	バレーボール
〃	横山 浩一	ソフトテニス
〃	綿引 亮太	バレーボール

表Ⅲ-1-4. 平成22年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科目名	コマ数			定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
		春学期	秋学期	計					
日吉地区開設	アーチェリー	2	2	4	80	94	1.18	80	100%
	ウォーキングエクササイズ	2	2	4	120	23	0.19	25	21%
	エアロビクス	8	8	16	320	213	0.67	229	72%
	ゴルフ	6	6	12	240	352	1.47	240	100%
	サッカー	10	10	20	160	292	1.83	343	214%
	ジョギング	1	2	3	90	28	0.31	37	41%
	ソフトテニス	1	1	2	40	26	0.65	27	68%
	ソフトボール	2	2	4	96	93	0.97	89	93%
	ダンス(モダンダンス)	2	2	4	80	27	0.34	29	36%
	ボディコンディショニング(ヨガ&ピラティス)	2	2	4	80	243	3.04	94	118%
	テニス	16	16	32	850	646	0.76	671	79%
	水泳	13	13	26	520	235	0.45	258	50%
	アクアエクササイズ	1	1	2	40	17	0.43	24	60%
	ニュースポーツ(A・B)	2	2	4	100	24	0.24	35	35%
	バスケットボール	15	15	30	760	650	0.86	643	85%
	バドミントン	9	9	18	480	471	0.98	401	84%
	バレーボール(A)	10	10	20	800	277	0.35	362	45%
	バレーボール(B)	3	3	6	240	94	0.39	102	43%
	ハンドボール	2	2	4	120	95	0.79	101	84%
	フェンシング	1	1	2	40	22	0.55	23	58%
	フットサル	4	4	8	200	250	1.25	194	97%
	フライングディスク(A・B)	3	3	6	150	61	0.41	71	47%
	ボクシング	2	2	4	120	125	1.04	127	106%
	剣道	7	7	14	280	53	0.19	60	21%
	合気道	1	1	2	60	72	1.20	60	100%
	自動車	3	3	6	120	154	1.28	120	100%
	柔道	3	3	6	180	39	0.22	39	22%
	体力UPコース	10	10	20	440	287	0.65	350	80%
	卓球	6	6	12	360	376	1.04	351	98%
	野球	4	4	8	240	61	0.25	79	33%
	軟式野球	1	1	2	60	82	1.37	58	97%
陸上競技	3	2	5	100	19	0.19	28	28%	
ボディメイクエクササイズ	4	4	8	160	143	0.89	156	98%	
日吉合計	159	159	318	8296	5810	0.70	5486	66%	
三田地区開設	テニス	6	6	12	160	137	0.86	137	86%
	バレーボール	2	2	4	100	45	0.45	45	45%
	弓術	2	2	4	80	73	0.91	73	91%
	剣道	2	2	4	80	32	0.40	32	40%
	合気道	1	1	2	60	38	0.63	38	63%
	柔道	2	2	4	120	14	0.12	14	12%
	三田合計	15	15	30	600	355	0.59	339	57%
全体合計	174	174	348	8896	6165	0.69	5825	65%	

平成22年度は、前年度に行われていた記念館耐震工事の終了に伴い記念館種目が平成20年度並みのコマ数に戻ったこと、ソフトボール授業が復活し、新種目として気功が加わったことも合わせ、日吉・三田合計で総開講コマ数は348コマとなった。これは前年度に比べ54コマの増加である。また総定員数も8896名となり、昨年より約1200名受け入れ可能人数が増加した。平成19～20年度には、150年記念事業に伴う諸事情によりコマ数と定員数の大幅な減少を余儀なくされたが、今年度は受け皿としての定員数は完全に回復した。充足率は定員を何名にするかによって影響を受けるため、充足率の大小をもって単純に評価することはできない。しかしながら、定員数が多いということはそれだけより多くの学生の履修を受け入れる態勢が整っているわけであるから、現在の充足率はまだ低く、学生の更なる取り込みを図る努力をしなければならないだろう。今後も開講種目とコマ数のあり方

を検討していく必要がある。

表Ⅲ-1-5に体育実技A・B（シーズンスポーツクラス）の各種目の担当者及び履修状況を示す。昨年度に引き続き、器械体操は開講せず、開講種目数は10種目であった。履修者数は284名、前年比+6%で、充足率も67%（前年比+4%）とわずかに増加した。全体の倍率は前年度の0.61倍から0.66倍へとやや上昇した。弓術は倍率が1.6倍と相変わらず人気種目であったが、最終登録者数が定員を割ったため充足率は100%に達しなかった。空手は履修者数が昨年の18名から36名に倍増し充足率も45%から90%と大幅に数字を伸ばした。山岳は6名の増加であるが充足率は前年度より30%増加した。シーズンスポーツは、ウィークリースポーツとして体験することが難しく、集中授業ならではの特徴をもった種目が多い。その種目の魅力を今後どう伝えていくか、実施時期、実施形態等を検討していく必要がある。

表Ⅲ-1-5. 平成22年度 体育実技A・B（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科目名	担当者	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
春学期	7 8月	空手	久保田正美	40	29	0.73	36	90%
		弓術	齋藤 隆男	40	65	1.63	35	88%
		水泳(オープンウォータースイミング)	鷺見 全弘	25	8	0.32	10	40%
		馬術(B)	細田 壮一	32	36	1.13	38	119%
		山岳(B)	丸 誠一郎	20	8	0.40	9	45%
		ヨット(B)	金子 隆司	40	30	0.75	34	85%
秋学期	8 9月	アウトドアレクリエーション(B)	村山 光義	40	22	0.55	26	65%
		ビーチバレー(B)	石手 靖	30	14	0.47	19	63%
	2月	スキー(B)	吉田 久男	120	35	0.29	39	33%
		スケート(B)	小山 正	40	34	0.85	38	95%
計				427	281	0.66	284	67%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、長年継続的に体育実技を履修した学生による授業評価を実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授業改善に努めている。

平成22年度も前年度に続き、履修者の意見をより詳細に把握するため、学生にアンケートの自由記述部分についてできるだけ率直な意見を記すよう促した。

平成18年度秋学期から始まった Web によるアンケート回収の試みは5年目を迎えた22年度も継続され、ほとんどの専任教員は Web によるアンケート方式で実施した。なお非常勤講師・実技指導員の授業では引き続き紙による回収を実施した。

Web アンケートの回収率は、18年度は20%、19年度は春30%、秋50%、20年度は春60%、秋53%と増加傾向を示していたが、21年度春54.4%、秋48.3%、22年度は春53.4%、秋44.1%とここ2年間、回収率が低下した状態が続いている（いずれも各時限の回答率の平均値）。実施に際してはこれまでと同様に、授業終了3週間前より入力可能とし、回答人数を毎日把握することにより、未実施者に対しては残りの授業で実施を促した。携帯電話からの回答を促進するため QR コード票を記載した説明用紙も同時に配布した。時間の十分取れない授業時間中の紙面アンケートに比べ Web アンケート回収は、後でじっくりと考えて回答できるため、自由記述に意見を書きやすいというメリットが挙げられる。回収率は低いですが、Web によるアンケート実施を有効活用するためにも今後各教員が積極的にアンケートへの回答を促す努力を続けなければならない。

以下、Web、紙面アンケートとも同一に扱い集計を行った。表Ⅲ-1-6、表Ⅲ-1-7にアンケート回答者数及びアンケート調査用紙の質問項目を示す。アンケートの各質問項目には、「強くそう思う」（5点）から「まったく

そう思わない」（1点）までの5段階で回答させ、得点化して評価した。

表Ⅲ-1-6. アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	1782
秋学期ウィークリー	1394
春学期講義・演習	108
秋学期講義・演習	24
シーズン	189

1) 体育実技ウィークリー種目の授業評価

春学期および秋学期ウィークリー実技における質問項目別の5段階評価の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-1, 2に示す。結果を見るとほぼ例年と同じであり以下のようにまとめられる。

春・秋の学期間には差はほとんどなく、同じ傾向が得られた。昨年度設定した質問項目の「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」については、昨年と比べわずかにポイントは上昇したが、他の評価項目に比べて最も平均点が低く、4点をわずかに超えるレベルであった。このことは、未だに授業の内容を十分に吟味せず、学生間の情報や種目名のイメージ等で履修の選択をしている学生が少なからずいることを示している。また曜日や時限による制約から単に時間割を埋めるために履修しているケースもあると考えられる。いずれにしても履修に際してシラバスが有効に活用されていない可能性がある。シラバスは極めて限られた紙面の中でいかに授業内容を的確に示し、関心と魅力を持たせるかが重要である。教員はそのための努力を惜しむべきではないが、同時に学生の目をシラバスへ向けさせる工夫も必要であろう。学生がシラバスをガイドにしながら履修の選択をすることがスタンダードになっていけば、今後授業内容に関心を持って履修するケースは確実に増えるであろう。

表Ⅲ-1-7. アンケート調査用紙 (表裏)

平成22年度体育科目 (講義・演習・実技) 履修者アンケート

慶應義塾大学体育研究所

このアンケートは、FD「Faculty Development: 大学教員の資質開発 (授業内容、方法の改善・向上)」をめざして行われるものです。皆さんの意見を次年度以降の授業に反映させるとともに、今後の塾内のスポーツ振興に対して役立てる目的以外には用いませんので率直な意見をお聞かせください

- ・科目名を記入してください _____
- ・担当教員名を記入してください _____
- ・学期に○印 (春 ・ 秋)
- ・曜日時限に○印 (月・火・水・木・金) 曜、(1・2・3・4・5) 限
- ・実施地区に○印 日吉 ・ 三田

● 受講した授業についての以下の質問に関して、

5 _____ 4 _____ 3 _____ 2 _____ 1
 強く思う そう思う どちらとも言えない そう思わない 全く思わない
 の5つの中から一番当てはまる番号に○印を付けてください。

履修者全員 (講義・演習・実技) 回答

- | | |
|-------------------------------|-------------------|
| 1. 自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 2. 教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 3. 教員の指導・教授方法は適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 4. 教員はこの授業についての十分な知識を持っていた | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 5. 教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 6. 教員の話し方は聞き取りやすかった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 7. この授業は塾生にとってふさわしいものだった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 8. この授業は自分にとって満足出来るものであった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 9. この授業によって知識を深めることができた | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 10. この授業の目的・ねらいを十分理解できた | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 11. この授業の内容は興味のあるものだった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 12. このクラスの雰囲気は良好であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 13. 自分はこの授業に意欲的に取り組んだ | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

実技履修者のみ回答

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 14. この授業は健康や体力の向上に役立った | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 15. この授業によって運動技術が向上した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 16. 運動量は適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

講義・演習履修者のみ回答

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| 17. この授業では配布資料やプレゼンテーションが適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
|---------------------------------|-------------------|

裏面へ続きます

●自由記述1

この授業を履修した理由・動機について

●自由記述2

授業内容について
よかったこと：

改善を要すること：

●自由記述3

教員について
よかったこと：

改善を要すること：

●自由記述4

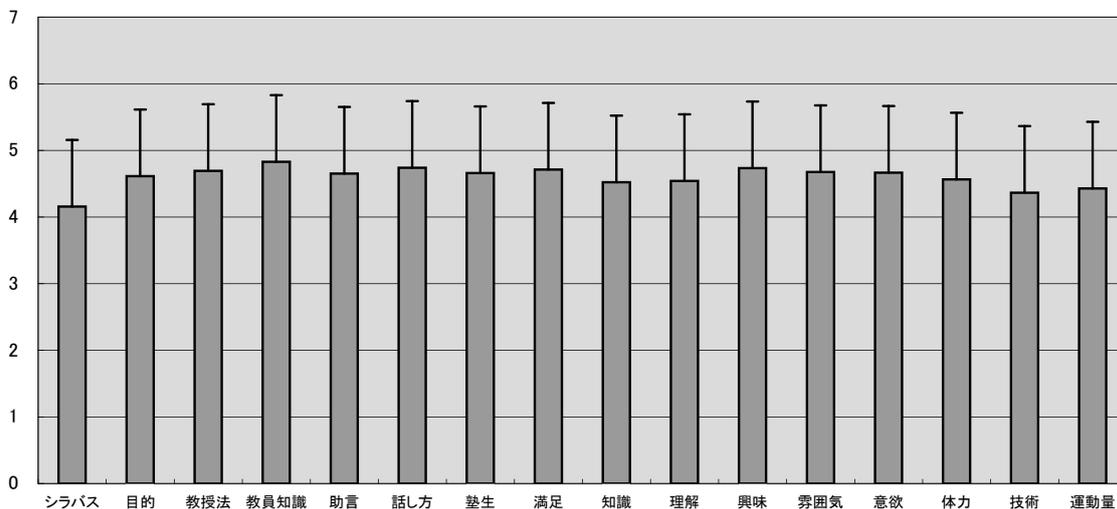
施設および機器・用具等について
よかったこと：

改善を要すること：

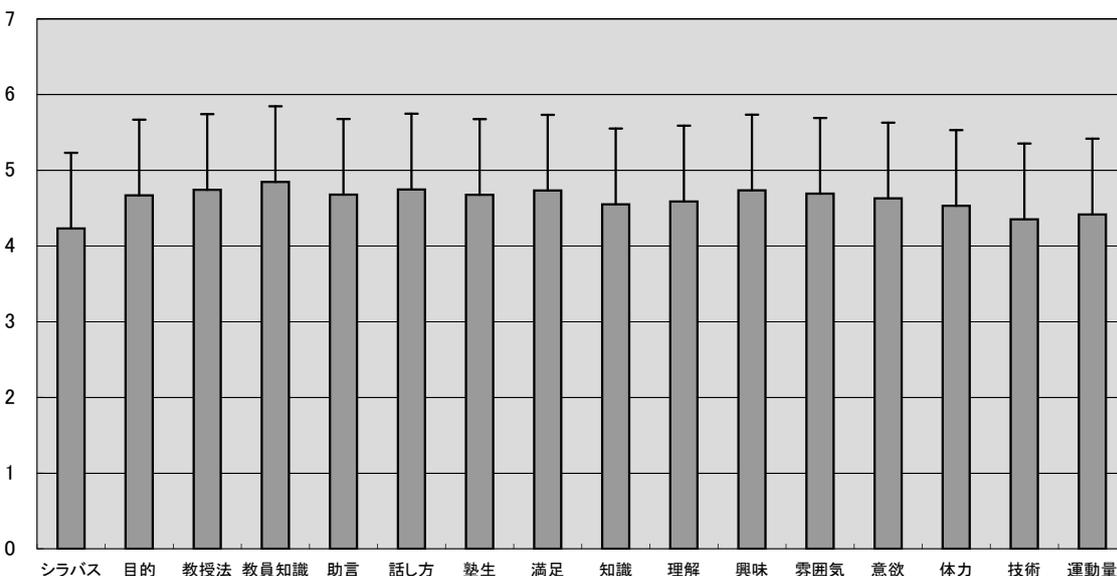
●自由記述5

体育科目全般に関する意見および提案

ご協力ありがとうございました。



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期ウィークリー全体平均）



図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）

もう一つ昨年度設定した項目である「この授業の目的・ねらいを十分理解できた」は他の項目同様、4点以上の高い肯定的評価であった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」であり、目的の説明や話し方、教授法の適切さ等の教員に対する評価項目が高い得点であった。平均点が低い項目は先に挙げたシラバスに関する項目の他、「この授業によって運動技術が向上した」、「運動量は適切であった」という項目で、4点以上ではあるが全体の中では比較的低い評価であった。

表Ⅲ-1-8, 9には質問項目の種目別の5段階評価集計を春学期、秋学期別に示した。こちらも同様に、例年と同じ傾向が見られた。す

なわち、全体の評価からは、「シラバスの内容への関心」「運動技術が向上」「運動量の適切さ」などの得点が低かった。「シラバスの内容への関心」については、アーチェリー、卓球、バスケットボール、バドミントン、フットサル、野球、陸上競技は昨年度の3点台から4点台へ上昇し改善傾向が見られた。アクアエクササイズ、軟式野球、バレーボール、モダンダンスなどが3点台の低い評価となっていた。「運動量の適切さ」は、種目特性と履修者の運動欲求とのズレが評価の低さに現れることがある。そのことを踏まえた上で、教員が種目特性を理解させながら、いかに履修者の運動欲求を満たしていくかが課題になると考えられる。

表Ⅲ-1-8. 種目別の5段階評価集計一覧（春学期ウィークリー）

種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	38	平均	4.0	4.5	4.7	4.9	4.6	4.7	4.5	4.5	4.2	4.2	4.6	4.6	4.6	3.8	3.7	3.9
		標準偏差	1.1	0.6	0.5	0.3	0.7	0.5	0.6	0.8	0.8	0.7	0.7	0.6	0.6	1.0	1.0	0.9
アクアエクササイズ	5	平均	3.6	4.2	4.8	4.6	4.8	4.8	4.4	4.8	3.8	4.2	4.4	4.8	4.4	4.6	4.0	4.0
		標準偏差	1.1	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7
合気道	38	平均	4.4	4.9	4.8	5.0	4.8	4.9	4.9	4.8	4.9	4.7	4.9	4.9	4.7	4.6	4.4	4.4
		標準偏差	1.0	0.4	0.4	0.2	0.4	0.3	0.3	0.4	0.3	0.6	0.2	0.3	0.5	0.6	0.8	0.8
ウォーキングエクササイズ	9	平均	4.0	4.6	4.7	4.8	4.8	4.8	4.2	4.8	4.2	4.3	4.6	4.6	4.3	4.3	3.3	4.1
		標準偏差	0.9	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.8	0.4	0.8	0.7	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6
エアロビクス	61	平均	4.1	4.8	4.9	4.9	4.7	4.9	4.7	4.9	4.2	4.5	4.7	4.8	4.6	4.6	4.0	4.5
		標準偏差	0.8	0.4	0.3	0.3	0.5	0.2	0.4	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.8	0.6
気功	27	平均	4.5	4.9	4.9	4.9	4.7	4.1	4.4	4.7	4.7	4.6	4.7	4.6	4.6	4.4	3.3	4.0
		標準偏差	1.0	0.3	0.3	0.4	0.5	0.8	0.8	0.5	0.4	0.6	0.5	0.6	0.7	0.6	0.9	1.0
弓術	27	平均	4.6	4.7	4.8	4.9	4.7	4.8	4.8	4.9	4.7	4.7	4.8	4.8	4.7	4.3	4.2	4.4
		標準偏差	0.8	0.6	0.5	0.3	0.7	0.4	0.5	0.4	0.6	0.6	0.5	0.5	0.4	1.0	1.1	0.9
剣道	35	平均	4.1	4.7	4.7	5.0	4.6	4.7	4.4	4.7	4.7	4.3	4.7	4.7	4.5	4.4	4.3	4.3
		標準偏差	0.9	0.5	0.6	0.2	0.6	0.5	0.8	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.6	0.6	0.6	0.7
ゴルフ	75	平均	4.1	4.4	4.3	4.7	4.2	4.7	4.6	4.6	4.3	4.3	4.7	4.3	4.7	4.2	4.4	4.2
		標準偏差	1.1	0.6	0.7	0.5	0.8	0.5	0.6	0.7	0.8	0.7	0.5	0.8	0.6	0.9	0.8	0.8
サッカー	91	平均	4.0	4.6	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.6	4.5	4.6	4.7	4.6	4.6	4.7	4.4	4.4
		標準偏差	1.1	0.7	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.7	0.8	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.8	0.9
自動車	43	平均	4.6	4.6	4.6	4.8	4.5	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.5	4.1	4.4	3.4	3.8	3.5
		標準偏差	0.7	0.6	0.6	0.4	0.7	0.6	0.8	0.8	0.8	0.7	0.7	0.8	0.7	1.2	1.0	1.1
柔道	21	平均	4.2	4.9	4.9	4.9	4.8	4.8	4.6	4.8	4.8	4.7	4.8	4.9	4.6	4.6	4.5	4.5
		標準偏差	1.1	0.4	0.3	0.5	0.4	0.4	0.7	0.5	0.5	0.7	0.4	0.4	0.6	0.6	0.6	0.7
ジョギング	4	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
水泳	76	平均	4.3	4.8	4.9	4.9	4.8	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.9	4.7	4.7
		標準偏差	1.0	0.5	0.3	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.5	0.4	0.4	0.6	0.6
ソフトテニス	0	平均																
		標準偏差																
ソフトボール	39	平均	4.4	4.6	4.7	4.9	4.8	4.9	4.6	4.7	4.5	4.5	4.6	4.7	4.7	4.7	4.5	4.5
		標準偏差	1.1	0.5	0.6	0.4	0.4	0.3	0.7	0.7	0.9	0.7	0.7	0.6	0.5	0.6	0.9	0.8
体力UPコース	100	平均	4.1	4.7	4.7	4.8	4.6	4.7	4.5	4.6	4.5	4.5	4.6	4.3	4.6	4.7	4.3	4.3
		標準偏差	1.0	0.5	0.7	0.5	0.7	0.5	0.7	0.6	0.7	0.7	0.6	0.9	0.6	0.5	0.8	0.7
卓球	107	平均	4.2	4.6	4.6	4.8	4.7	4.5	4.6	4.7	4.4	4.6	4.7	4.7	4.7	4.6	4.4	4.4
		標準偏差	1.0	0.6	0.6	0.5	0.6	0.8	0.6	0.5	0.8	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.8	0.7
テニス	246	平均	4.0	4.6	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.6	4.6	4.8	4.7	4.7	4.7	4.6	4.5
		標準偏差	1.1	0.6	0.5	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7
軟式野球	23	平均	3.9	4.8	4.7	4.7	4.9	4.7	4.9	4.8	4.8	4.7	4.8	4.9	4.9	4.8	4.7	4.6
		標準偏差	1.4	0.4	0.5	0.6	0.3	0.5	0.3	0.4	0.4	0.6	0.5	0.5	0.3	0.5	0.7	0.8
ニュースポーツ	14	平均	4.1	4.6	4.7	4.9	4.7	4.8	4.4	4.6	4.4	4.5	4.7	4.6	4.3	3.5	3.1	3.9
		標準偏差	0.9	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.8	0.6	0.8	0.7	0.6	0.6	0.8	1.0	0.9	0.9
バスケットボール	244	平均	4.4	4.7	4.7	4.9	4.7	4.8	4.7	4.8	4.6	4.6	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	0.9	0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7
バドミントン	134	平均	4.1	4.6	4.7	4.8	4.6	4.7	4.7	4.7	4.5	4.5	4.7	4.7	4.7	4.6	4.5	4.5
		標準偏差	0.9	0.6	0.5	0.4	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.7
バレーボール	168	平均	3.7	4.4	4.6	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.3	4.4	4.6	4.8	4.6	4.6	4.3	4.5
		標準偏差	1.2	0.7	0.6	0.5	0.5	0.4	0.6	0.5	0.8	0.8	0.7	0.5	0.7	0.7	0.9	0.7
ハンドボール	21	平均	4.0	4.3	4.5	4.9	4.5	4.7	4.6	4.4	4.5	4.4	4.8	4.5	4.6	4.5	4.2	4.3
		標準偏差	1.0	0.9	1.1	0.3	0.7	0.6	0.6	0.9	0.7	0.9	0.4	0.6	0.7	0.7	1.0	1.0
フェンシング	8	平均	4.3	4.1	4.4	4.8	4.1	4.4	4.8	4.6	4.5	4.4	4.6	4.5	4.6	4.4	4.4	4.0
		標準偏差	0.7	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.9	0.7	1.4
フットサル	8	平均	4.1	4.9	5.0	5.0	5.0	4.8	4.8	4.9	4.6	4.6	5.0	4.3	4.8	5.0	4.8	4.6
		標準偏差	1.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.0	0.7	0.5	0.0	0.5	0.7
フライングディスク	22	平均	4.1	4.8	4.9	5.0	4.7	4.9	4.7	5.0	4.5	4.5	5.0	4.9	4.5	4.4	4.1	4.5
		標準偏差	1.1	0.4	0.3	0.2	0.6	0.4	0.5	0.2	0.7	0.6	0.2	0.3	0.7	0.8	1.0	0.7
ボクシング	0	平均																
		標準偏差																
ボディコンディショニング	44	平均	4.6	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4	4.7	4.6	4.6	4.5	4.0	4.4
		標準偏差	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	0.6	0.7	0.7	0.9
ボディメイクエクササイズ	11	平均	4.4	4.5	4.5	4.8	4.7	4.8	4.6	4.6	4.4	4.6	4.6	4.5	4.6	4.7	4.0	4.4
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.7	0.7	0.5	1.0	0.8
モダンダンス	16	平均	3.8	4.4	4.6	4.9	4.7	4.8	4.6	4.5	4.5	4.4	4.5	4.8	4.6	4.2	4.0	4.3
		標準偏差	1.6	0.7	0.6	0.3	0.5	0.4	0.8	0.7	0.7	0.9	0.7	0.5	0.7	1.0	1.0	0.9
野球	23	平均	4.3	4.6	4.6	5.0	4.4	4.8	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.9	4.8	4.4	4.4	4.3
		標準偏差	1.0	0.9	0.9	0.2	1.0	0.4	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.3	0.4	0.9	0.7	1.0
陸上競技	4	平均	4.5	4.5	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	5.0	4.8	4.5	5.0	5.0	5.0	4.8	4.8	4.8
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.0	0.5	0.6	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5

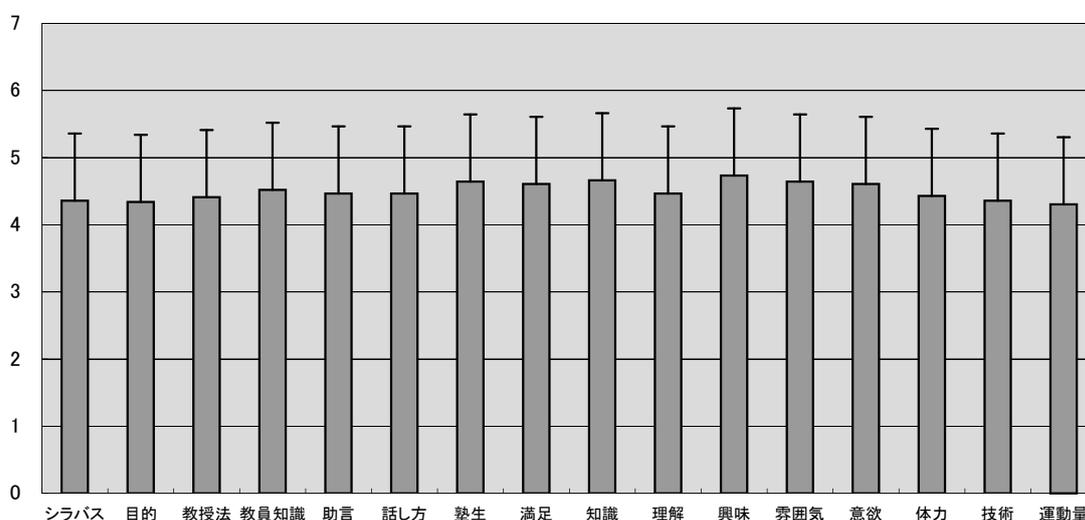
表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	31	平均	4.6	4.8	4.9	5.0	4.8	4.9	4.8	4.9	4.7	4.8	4.9	4.9	4.8	4.0	4.1	4.1
		標準偏差	0.6	0.4	0.3	0.0	0.5	0.4	0.5	0.3	0.5	0.4	0.3	0.3	0.6	0.8	0.9	1.0
アクアエクササイズ	2	平均	4.5	4.5	4.5	4.5	5.0	5.0	4.5	4.5	4.0	4.5	4.5	5.0	4.5	4.5	3.5	4.5
		標準偏差	0.7	0.7	0.7	0.7	0.0	0.0	0.7	0.7	1.4	0.7	0.7	0.0	0.7	0.7	0.7	0.7
合気道	32	平均	4.8	4.9	4.9	4.9	4.9	5.0	4.9	4.9	4.9	5.0	4.9	4.9	4.9	4.6	4.6	4.7
		標準偏差	0.6	0.4	0.2	0.5	0.2	0.2	0.4	0.2	0.3	0.2	0.3	0.2	0.3	0.7	0.7	0.7
ウォーキングエクササイズ	9	平均	4.6	4.9	4.9	4.9	4.9	5.0	4.8	4.9	4.8	4.9	4.9	4.9	4.8	4.8	4.1	4.7
		標準偏差	1.0	0.3	0.3	0.3	0.3	0.0	0.4	0.3	0.4	0.3	0.3	0.3	0.4	0.4	1.1	0.5
エアロビクス	55	平均	4.2	4.7	4.8	4.9	4.6	4.8	4.7	4.8	4.3	4.5	4.7	4.8	4.5	4.4	3.9	4.4
		標準偏差	0.7	0.5	0.4	0.3	0.6	0.5	0.5	0.4	0.6	0.6	0.5	0.4	0.5	0.6	0.9	0.7
気功	32	平均	4.3	4.6	4.6	4.8	4.5	4.1	4.3	4.5	4.4	4.5	4.6	4.6	4.4	3.9	3.1	3.8
		標準偏差	1.0	0.6	0.6	0.6	0.6	1.0	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.8	0.9	1.0	0.9
弓道	15	平均	4.6	4.5	5.0	4.9	4.9	5.0	4.9	5.0	4.8	4.7	5.0	4.9	4.5	4.5	4.4	4.5
		標準偏差	0.8	0.7	0.0	0.3	0.4	0.0	0.3	0.0	0.4	0.5	0.0	0.3	0.6	0.6	0.7	0.6
剣道	23	平均	4.2	4.7	4.8	5.0	4.4	4.7	4.7	4.6	4.7	4.4	4.7	4.7	4.3	4.1	4.3	4.3
		標準偏差	1.0	0.4	0.5	0.2	0.7	0.5	0.5	0.7	0.4	0.5	0.5	0.6	0.8	0.9	0.8	0.9
ゴルフ	38	平均	4.4	4.6	4.3	4.8	4.2	4.7	4.5	4.7	4.6	4.5	4.7	4.4	4.5	4.2	4.2	4.1
		標準偏差	0.9	0.5	0.7	0.4	0.7	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.5	0.9	0.6	0.8	0.8	0.7
サッカー	67	平均	4.2	4.7	4.8	4.9	4.8	4.8	4.7	4.5	4.7	4.8	4.7	4.6	4.6	4.8	4.6	4.7
		標準偏差	1.0	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.6	0.6	0.6	0.5	0.6	0.7	0.5	0.8	0.5
自動車	28	平均	4.5	4.9	4.8	4.9	4.6	4.6	4.7	4.8	4.7	4.7	4.9	4.7	4.6	4.0	4.4	4.3
		標準偏差	0.8	0.4	0.4	0.3	0.8	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.6	1.1	0.7	0.8
柔道	12	平均	4.4	4.8	4.8	5.0	4.8	4.8	4.8	4.9	4.8	4.9	5.0	4.9	5.0	4.9	4.8	4.6
		標準偏差	1.0	0.6	0.6	0.0	0.4	0.4	0.4	0.3	0.6	0.3	0.0	0.3	0.0	0.3	0.4	0.5
ジョギング	13	平均	4.3	4.7	4.7	4.8	4.7	4.8	4.6	4.7	4.0	4.6	4.8	4.8	4.8	4.5	4.4	4.0
		標準偏差	1.3	0.6	0.5	0.4	0.5	0.4	0.7	0.5	0.8	0.7	0.6	0.4	0.4	0.7	0.8	1.2
水泳	29	平均	4.3	4.5	4.7	4.9	4.6	4.7	4.6	4.7	4.7	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.8	4.3
		標準偏差	0.8	0.6	0.5	0.3	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.8	0.6	0.4	0.8	0.9
ソフトテニス	0	平均																
		標準偏差																
ソフトボール	32	平均	4.3	4.5	4.7	4.8	4.7	4.7	4.6	4.7	4.3	4.6	4.7	4.8	4.6	4.3	4.3	4.3
		標準偏差	1.1	0.8	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.6	1.0	0.7	0.6	0.5	0.7	0.8	0.8	0.8
体力UPコース	89	平均	4.3	4.6	4.6	4.8	4.5	4.6	4.4	4.6	4.4	4.6	4.5	4.2	4.5	4.7	4.2	4.4
		標準偏差	0.9	0.7	0.7	0.6	0.7	0.6	0.8	0.7	0.7	0.6	0.6	0.9	0.8	0.5	0.8	0.8
卓球	133	平均	4.3	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.7	4.6	4.6	4.8	4.8	4.7	4.4	4.5	4.4
		標準偏差	0.9	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.8	0.8
テニス	184	平均	4.2	4.6	4.8	4.8	4.6	4.8	4.7	4.8	4.7	4.6	4.8	4.7	4.7	4.7	4.6	4.5
		標準偏差	1.1	0.6	0.5	0.5	0.7	0.5	0.6	0.5	0.7	0.7	0.5	0.5	0.6	0.6	0.7	0.7
軟式野球	15	平均	4.3	4.5	4.7	4.8	4.6	4.7	4.7	4.8	4.5	4.5	4.7	4.8	4.7	4.3	4.2	4.1
		標準偏差	1.1	0.6	0.6	0.6	0.8	0.6	0.6	0.4	0.7	0.7	0.6	0.6	0.5	1.2	1.3	1.1
ニュースポーツ	8	平均	4.0	4.7	4.7	4.8	4.9	4.8	4.8	4.6	4.7	4.4	4.6	4.4	4.4	4.0	4.0	3.8
		標準偏差	1.1	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5	0.7	1.1	1.1	0.9	1.0
バスケットボール	174	平均	4.2	4.8	4.8	4.9	4.8	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.8	4.8	4.7	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	1.1	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.4	0.5	0.6	0.5	0.7	0.7
バドミントン	106	平均	4.1	4.6	4.7	4.9	4.6	4.7	4.7	4.7	4.6	4.5	4.7	4.7	4.7	4.5	4.5	4.4
		標準偏差	1.0	0.5	0.4	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8
バレーボール	123	平均	3.8	4.5	4.7	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.4	4.5	4.7	4.8	4.6	4.5	4.3	4.5
		標準偏差	1.2	0.6	0.5	0.5	0.4	0.4	0.5	0.6	0.8	0.7	0.6	0.4	0.7	0.7	0.8	0.8
ハンドボール	15	平均	3.7	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.7	4.6	4.7	4.6	4.7	4.8	4.6	4.6	4.6	4.5
		標準偏差	1.1	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.6	0.6	0.5	0.6	0.5	0.4	0.6	0.7	0.7	0.6
フェンシング	12	平均	4.5	4.8	4.9	5.0	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.7	5.0	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7
		標準偏差	0.9	0.4	0.3	0.0	0.4	0.6	0.4	0.4	0.4	0.8	0.0	0.4	0.6	0.5	0.7	0.7
フットサル	7	平均	4.0	4.7	4.6	4.9	4.3	4.4	4.3	4.6	4.1	4.1	4.4	4.0	4.3	4.6	4.0	4.3
		標準偏差	1.2	0.5	0.5	0.4	0.8	0.5	0.5	0.8	0.7	0.7	0.8	0.6	0.8	0.5	0.8	0.5
フライングディスク	15	平均	4.0	4.3	4.7	4.9	4.5	4.7	4.3	4.6	4.3	4.2	4.4	4.7	4.5	4.1	3.8	3.8
		標準偏差	0.8	0.9	0.5	0.3	0.8	0.5	0.8	0.8	0.9	0.9	0.9	0.6	1.1	1.1	1.0	1.1
ボクシング	19	平均	4.1	4.9	4.9	5.0	4.9	4.9	4.7	4.8	4.8	4.7	4.9	4.8	4.8	4.7	4.6	4.6
		標準偏差	1.1	0.2	0.2	0.0	0.3	0.3	0.6	0.4	0.4	0.5	0.3	0.4	0.4	0.5	0.6	0.8
ボディコンディショニング	32	平均	4.7	4.8	4.8	4.9	4.7	4.9	4.7	4.6	4.4	4.4	4.6	4.6	4.4	4.3	4.0	4.4
		標準偏差	0.5	0.4	0.4	0.3	0.6	0.3	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.8	1.1	0.9
ボディメイクエクササイズ	11	平均	4.7	4.8	4.6	4.7	4.5	4.8	4.7	4.6	4.2	4.5	4.7	4.2	4.5	4.7	4.1	4.6
		標準偏差	0.5	0.4	0.7	0.6	0.8	0.4	0.7	0.7	0.8	0.7	0.6	0.6	0.5	0.5	0.7	0.5
モダンダンス	11	平均	3.6	4.6	4.9	4.9	4.8	4.9	4.6	4.7	4.8	4.8	4.5	4.9	4.9	4.5	3.5	4.0
		標準偏差	1.6	0.7	0.3	0.3	0.4	0.3	0.5	0.5	0.4	0.4	0.7	0.3	0.3	0.9	0.9	0.9
野球	19	平均	4.2	4.6	4.5	4.7	4.5	4.6	4.4	4.4	4.5	4.4	4.6	4.6	4.6	4.4	4.3	4.2
		標準偏差	1.2	0.6	0.7	0.7	0.7	0.6	1.1	0.9	0.7	0.8	0.7	0.5	0.6	0.8	0.9	1.0
陸上競技	3	平均	5.0	5.0	5.0	4.3	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.7
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6

2) シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における質問項目別の5段階評価の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-3に示す。ウィークリー種目同様すべての項目で4点以上の肯定的評価が得られた。その中でも授業内容への興味、授業による知識の深化、クラスの雰囲気等に関する項目は高得点を示し、高い満足度が得られているようである。また、シーズンスポーツにおいても「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」項目の評価は他の項目に比べ得点は低かった。しかしながら昨年度の3点台から4点台へと上昇し改善傾向が見

られた。シーズンスポーツは春学期のガイダンス期間中に個別の種目ガイダンスを行わないため、シラバスの重要性はウィークリー種目以上に高いと思われる。今後もシラバスをより一層充実させる努力と、学生にシラバスへ目を向けさせる啓蒙が必要であろう。表Ⅲ-1-10には各項目の種目別の5段階評価集計を示した。こちらも「シラバスの内容への関心」の項目で、空手、スケートで3点台の低い評価であった。馬術は昨年度の3点台から大きく改善し、シーズンスポーツ種目中最も高いポイントだった。その他の項目はほぼ例年同様の結果となった。



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価 (シーズンスポーツ全体平均)

表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧 (シーズンスポーツ)

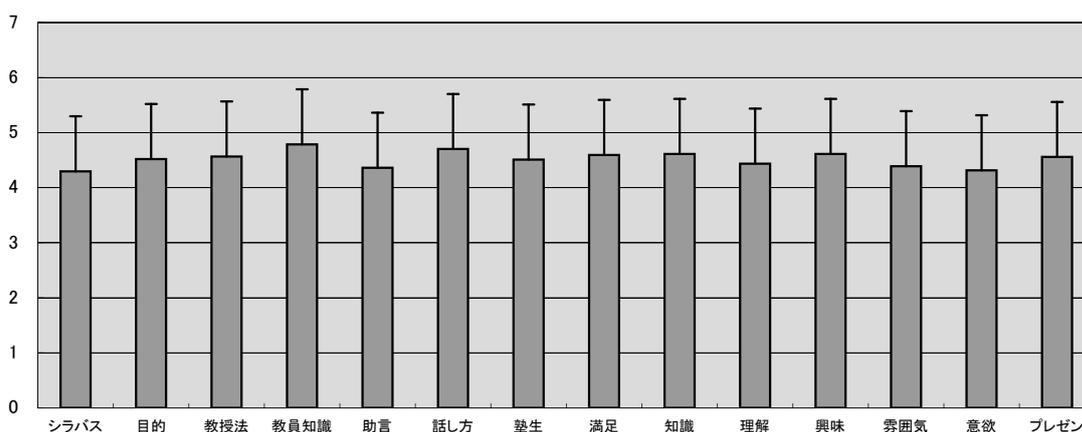
種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
空手	22	平均	3.9	4.5	4.8	4.9	4.8	4.8	4.6	4.5	4.5	4.6	4.6	4.8	4.7	4.7	4.5	4.5
		標準偏差	1.2	0.7	0.5	0.3	0.5	0.4	0.7	0.8	0.8	0.7	0.6	0.5	0.6	0.5	0.7	0.7
弓術	21	平均	4.4	4.7	4.7	4.8	4.9	4.5	4.7	4.8	4.5	4.3	4.9	4.9	4.9	4.3	4.1	4.2
		標準偏差	0.9	0.6	0.6	0.9	0.3	0.8	0.5	0.7	0.8	0.8	0.4	0.3	0.4	0.7	0.9	0.8
OWS	10	平均	4.1	4.6	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	5.0	4.7	4.8	4.7
		標準偏差	1.4	1.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.7	0.4	0.5
山岳	3	平均	4.0	4.7	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.7	5.0	4.7	4.7	5.0	4.7	4.7	4.7	4.7
		標準偏差	1.7	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.6	0.6	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6
馬術	30	平均	4.6	4.3	4.5	4.5	4.5	4.3	4.7	4.8	4.8	4.5	4.8	4.7	4.7	4.6	4.6	4.3
		標準偏差	0.6	0.8	0.8	0.7	0.9	0.9	0.5	0.5	0.4	0.7	0.6	0.6	0.6	0.8	0.7	1.0
ヨット	26	平均	4.1	4.4	4.3	4.5	4.5	4.6	4.6	4.4	4.5	4.4	4.7	4.6	4.5	4.2	4.1	4.3
		標準偏差	1.1	0.6	0.7	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.8	0.7	0.7	0.6	0.6	0.9	0.9	0.9
ビーチバレー		平均																
アウトドアレクリエーション	21	平均	4.2	4.3	4.5	4.5	4.5	4.3	4.5	4.5	4.5	4.4	4.7	4.8	4.4	4.3	3.5	4.3
		標準偏差	1.2	1.1	0.7	0.8	0.6	0.8	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.5	0.7	0.9	1.2	0.7
スケート	29	平均	3.7	4.3	4.7	4.7	4.7	4.5	4.6	4.8	4.3	4.4	4.7	4.6	4.7	4.4	4.5	4.4
		標準偏差	1.4	0.8	0.6	0.7	0.5	0.8	0.7	0.6	0.9	0.7	0.6	0.7	0.5	0.9	0.8	0.8
スキー	27	平均	4.0	4.6	4.5	4.9	4.6	4.7	4.5	4.6	4.6	4.5	4.7	4.7	4.8	4.5	4.6	4.0
		標準偏差	1.3	0.6	0.8	0.5	0.8	0.7	0.7	0.6	0.5	0.8	0.5	0.6	0.4	0.8	0.6	0.9

3) 講義・演習科目の授業評価

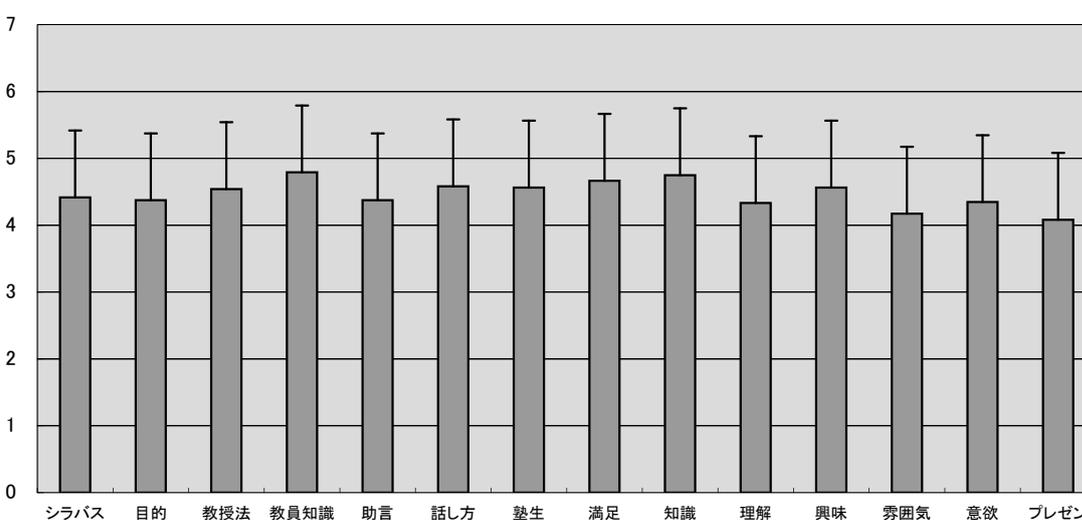
講義・演習科目の授業評価について春学期、秋学期別に集計した結果を図Ⅲ-1-4,5に示す。今年度は昨年度同様、春・秋学期間で評価にそれほど大きな差は見られず、おおむね高い評価を得ていた。またすべての項目が4点台となり、3点台の項目が2、3見られた過去2年間に比べて全体的に評価は上昇している。昨年度から設定した、「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」という項目は、4点台で体育科目としては平均的な評価であった。この項目の評価が実技より高いことは、講義・演習の履修決定に際して、学生が授業内容により注意を寄せ、その内容が履修決定の重要な要因の一つになっ

ていることを推測させる。従って、より魅力的なシラバスにしていくことが講義・演習の履修者拡大に重要と考えられる。

また、春学期の「教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した」、秋学期の「このクラスの雰囲気は良好であった」が項目全体の中ではより低い評価であった。一方で「教員の知識」、「教員の話し方」、「知識を深める」、「授業内容への興味」などが例年通り高い評価を得ていた。講義は演習に比べ、どうしても教員からの一方向的な教授になりがちであるが、履修者数から見た授業規模は比較的小さく、この点に関しては今後改善のための努力が必要であろう。



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期講義・演習の全体平均）



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義・演習の全体平均）

3. 通信教育部対象の科目

1) 体育理論

通信教育課程の体育理論は平成22年度より、テキスト科目のレポート並びに試験問題の出題・採点を植田史生君、村山光義君、村松憲君で担当した。また、夏期スクーリング（平成22年7月30日（金）から8月6日（金）の日曜を除く7日間）においても保健体育科目として体育理論・保健衛生をオムニバス形式で実施した。体育理論はテキスト科目出題と同様の3名で担当した。スクーリングでの各教員のテーマを表Ⅲ-1-11に示す。

2) 体育実技

夏期・冬期スクーリングにおいて体育実技を開講した。夏期は、平成22年7月30日（金）

から8月6日（金）の日曜を除く7日間、15種目を日吉キャンパスにて午前中の第1-2時限（2時間15分間）実施した。またウォーキングエクササイズは昨年度同様秋期開講とし、平成22年9月17日（金）から20日（月）までの3泊4日で、協生館を宿泊場所とした合宿形式で実施した。真夏の厳しい気候条件下で行われている夏期の他の種目についても、今後実施時期の見直しを含め、新たなプログラムの展開を検討する余地があると考えられる。

冬期には平成23年2月10日（木）から13日（日）までの3泊4日でスキーを戸狩温泉スキー場で実施した。各担当者及び履修者数を表Ⅲ-1-12に示す。

表Ⅲ-1-11. 平成22年度通信教育部講義開講科目および担当者一覧

	担当者	テーマ
保健衛生	齊藤郁夫	高血圧
	河邊博史	糖尿病
	和井内由充子	虚血性心疾患
	辻岡三南子	医学とスポーツ
	徳村光昭	子どもの生活習慣
	南里清一郎	エイズ
体育理論	植田史生	スポーツ文化・スポーツに関する諸問題
	村山光義	スポーツと人間の関係及びその教育的意義
	村松憲	身体のしくみ・運動のしくみ・トレーニングのしくみ

表Ⅲ-1-12. 平成22年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種 目 名	担当者	定 員	履修者数	充足率
夏 期	エアロビクス	佐々木玲子	20	18	90.0%
	剣道	吉田 泰将	20	6	30.0%
	ゴルフ	勝又 正浩	20	17	85.0%
	柔道	安藤 勝英	10	3	30.0%
	ソフトボール	綿田 博人	20	12	60.0%
	体力アップコース	山内 賢	25	18	72.0%
	卓球	松田 雅之	30	22	73.3%
	バスケットボール	加藤 大仁	25	20	80.0%
	バドミントン	加藤 幸司	40	32	80.0%
	テニス	村松 憲	20	18	90.0%
	フットサル	須田 芳正	25	15	60.0%
	太極拳	孔 徳勝	20	16	80.0%
	バレーボール	矢作 拓也	30	13	43.3%
	レクリエーションスポーツ	谷口こゆき	25	15	60.0%
	水泳	鳥海 崇	40	23	57.5%
秋期	ウォーキングエクササイズ	近藤 明彦	30	24	80.0%
冬期	スキー	水野 英夫	70	35	50.0%
	合 計		470	307	65.3%

4. 他学部および塾内における授業協力

体育研究所所員は、日吉・三田において開講される体育研究所設置の体育科目および通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、各学部・センターの設置科目や一貫

教育校の授業についても研究所所員が協力をしている。平成22年度の協力科目および担当者を表Ⅲ-1-13に示す。今後もこうした塾内における共同参画型の授業を発展させたいと考える。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当および協力

授 業 科 目 名	担 当 者	開講学部など	曜日時限など
スポーツ科学	佐々木玲子, 板垣悦子, 加藤幸司	薬学部	春学期木曜 1, 2 時限
健康科学	板垣悦子	薬学部	春学期金曜 3 時限
体育Ⅱ・Ⅲ(水泳)	森下愛子	総合政策学部 環境情報学部	春秋学期木曜 3 時限, 金曜 2・3 時限
薬学的保健体験学習	板垣悦子	薬学部	秋学期火曜 1, 3 時限
人体の科学	佐々木玲子, 村山光義	理工学部	秋学期水曜 5 時限

Ⅲ-2 スポーツイベントの開催

1. 塾長杯・塾内競技大会

1) 第12回塾長杯バレーボール大会

1. 開催日：平成22年5月22日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～17:00
4. 参加チーム数：41チーム（チャンピオンリーグ13、エンジョイリーグ28）
5. 参加者数：約440名（チャンピオンリーグ98名、エンジョイリーグ236名、観客約100名）
6. ゲーム数：58試合
予選リーグ29試合 / 決勝トーナメント29試合
7. 協 力：大会実行学生スタッフ / 放送研究会（K-Sound） / 大塚製薬（株）
8. 表彰チーム

チャンピオンリーグ

- 優勝：巨魂オールスターズ
2位：老害
3位：俺がポッチャマだ！
ガチャピンの分まで頑張ります。

エンジョイリーグ

（勝ちトーナメント）

- 優勝：田園調布 Gusts
2位：ぺろぺろキャンディーズ
3位：丸投げ

（負けトーナメント）

- 優勝：チームわちゃ
2位：他種目教員チーム
3位：sugarbacks

ひよこ

9. コメント：この大会には、チャンピオンリーグ13、エンジョイリーグ28の計41チームが参加した。塾内のバレーボールサークルのメンバーが多数参加したチャンピオンリーグは、4、4、4、5チーム計4ブロックに分かれてリーグ戦を行い、各ブロックの1位を勝敗で、1位か

ら4位までを得失点差で順位付けした。その順位付けに基づき決勝リーグ進出トーナメントを行い、決勝リーグを行った。また、エンジョイリーグは例年通り女子の参加も多く、エントリーした全チームの間でトーナメントが行われた。

チャンピオンリーグ・エンジョイリーグともに白熱のゲームが続き、教員チームの参戦も相まって大盛況であった。さらに、放送研究会のアナウンスが円滑な試合進行に貢献しただけでなく、大会を大いに盛り上げてくれた。



塾長杯バレーボール大会

2) 塾長杯フットサル大会

1. 開催日：平成22年7月3日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～17:00
4. 参加チーム数：32チーム
5. 参加者数：約360名（登録選手数262名、観客約100名）
6. ゲーム数：55ゲーム（1ゲーム15分間）
1チームのゲーム数：最低3、最高6ゲーム
7. 協 力：独立団体フットサル倶楽部（10名） / 放送研究会（5名）
8. 参加チーム抽選会：平成22年6月23日（水）16:30～17:00 スポーツ棟（体育研究所）2F会議室
9. 応募チーム数：56チーム
10. 表彰チーム
優勝：FC.ChicMags
2位：OKB48
3位：FC.GEIL
沢田ボーリング愛好会
11. コメント：「2010 塾長杯フットサル

大会」はワールドカップサッカー南アフリカ大会開催中ということもあり、フットボール人気が最高潮に盛り上がっている中で開催された。抽選会で当選した32チームはフェアプレー精神のもと全力を尽くしてプレーし勝負していた。現在塾内には100を超えるフットサルの同好会が存在し、フットサルの技術、戦術の向上だけでなく、フットサルのルール理解度も上がっていると感じた。競技は得点差の大きなゲームがいくつか見られたが例年同様高いレベルを維持していた。決勝トーナメントに入りPK戦に勝敗の行方を持ち込む接戦も見られ大いに盛り上がった。

運営面でも大きなトラブルはなくゲームの進行も円滑に行われ、長時間審判として協力してくれたフットサル倶楽部部員10名に心から感謝したい。



塾長杯フットサル大会

3) 塾内バスケットボール大会

1. 開催日：平成22年12月11日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～17:00
4. 参加チーム数：24チーム
5. 参加者数：約300名（アルティメットリーグ106名、エンジョイリーグ100名、観客約100名）
6. ゲーム数：50試合（予選：6分×2（ハーフタイム1分）、決勝：8分×2（ハーフタイム2分）、決勝戦のみ10分×2（ハーフタイム2分））
7. 協 力：学生スタッフ（4名）/放送

研究会（5名）/UNICORNS/審判団（6名：日体大）

8. 参加チーム抽選会：平成22年11月29日（月）16:30～17:00 スポーツ棟（体育研究所）2F会議室

9. 応募チーム数：47チーム

10. 表彰チーム

アルティメットリーグ

優勝：Lバスケットボール（浅野）

2位：team DATE

3位：noah

TEAM げん○なかざわ

エンジョイリーグ

優勝：チーム・梅ちゃん好いとーよ

2位：健マネ

3位：久メンツ☆

運営スタッフ

11. コメント：毎年好ゲームが繰り広げられる塾内バスケットボール大会だが、今回も学生スタッフ、放送研究会や審判団である日体大女子バスケットボール部員の協力により随所に白熱した試合が展開された。今回は事前の申請や参加チーム数を絞るための抽選会について例年以上に厳格さを求めたこともあり、例年問題となっている二重登録や大会当日の急な出場辞退は発生しなかった。競技中の選手同士の接触による足首の捻挫など、けが人への対応も医療機関への搬送も迅速に行うことができた。次回以降も同様に日頃の競技力を発揮するだけでなく、塾



塾内バスケットボール大会

生同士の交流を活発化させるためにも本大会をうまく継続していきたい。

4) 新春塾内卓球大会

1. 開催日：平成23年1月15日（土）
2. 会 場：スポーツ棟（体育研究所）地下1階卓球場
3. 開催時間：10:00～14:00（午前の部ダブルス、午後の部シングルス）
4. 参加者数：36名（塾生22名、教職員及び卒業生14名）試合出場者延べ45名（シングルス21名、ダブルス12ペア）
5. ゲーム形式
予選リーグ：11点先取3セットマッチ
決勝トーナメント：11点先取3セットマッチ（決勝のみ5セットマッチ）
6. 表彰チーム
ダブルス（セミプロの部）
優 勝：秋山昌弘君（法学部2年）・高橋慶光君（文学部2年）ペア
準優勝：鈴木悌二君（昭和26年経済学部卒）・体育会卓球部員ペア
ダブルス（エンジョイの部）
優 勝：辻一秀君（経済学部4年）・宮脇大典君（経済学部4年）ペア
シングルス（セミプロの部）
優 勝：秋山昌弘君（法学部2年）
準優勝：岡田拓朗君（薬学部5年）
シングルス（エンジョイの部）
優 勝：柳原智仁君（経済学部4年）
準優勝：堀田大輔君（経済学部4年）



新春塾内卓球大会

7. コメント：本大会において、木林弥生君（体育研究所非常勤講師卓球担当）には、当委員会にご協力いただき、大会の事前準備から当日運営に至るまで、ご本人の卓球に関するご経験を活かし、大会の円滑な運営にご尽力いただいた。また、卒業生の方々と対戦したことで、時代を超えた繋がりができた大会となった。

2. 公開講座

1) 水泳教室

1. 日 程：平成22年7月10日（土）、11日（日）
2. 会 場：日吉キャンパス協生館プール
3. 開催時間：18:00～19:30
4. 講 師：板垣悦子（体育研究所准教授）、鳥海崇（体育研究所専任講師）、森下愛子（体育研究所助教）、加藤慶一（体育研究所非常勤講師）
5. 参加者数：39名
6. 受講料：3,000円
7. コメント：協生館に竣工したプールにおいて初めて行う公開講座となった。最初のプールサイド集合時、参加者全員に参加賞としてTシャツを配布し、集合写真を撮影した。また、この集合写真は2日目終了後に参加者に配布し、とても好評であった。

講座は、スポーツ振興委員長の石手靖君の挨拶後、板垣君の準備体操ならびにアクアエクササイズによるウォーミングアップ後、各班（A：森下、B：鳥海、C：板垣、D：加藤）に分かれて講習を行った。A・Bコースは50mを泳げる人を対象とし、C・Dコースは25m泳げない人を対象とした。講座の内容は、1日目はクロールと背泳ぎ、2日目は平泳ぎとバタフライを行った。

全体として、講習内容のみならず、修了証や参加賞（Tシャツ）、写真の配布、協生館のプールで泳ぐ経験、そして世界

水泳出場者である森下君の泳ぎを間近で見られるなど、参加者にとって魅力ある公開講座となった。



公開講座「水泳教室」

2) 健康ジョギング教室

1. 日 程：平成22年10月15日(金)～11月1日(月) 計6回
(10/15(金)、18(月)、22(金)、25(月)、29(金)、11/1(月))
2. 会 場：日吉陸上競技場及び協生館トレーニングルーム及びエクササイズスタジオ
3. 開催時間：18:00～19:30
4. 講 師：松田雅之(体育研究所准教授)
特別講師：瀬古利彦(S&B食品(株)スポーツ推進局局长)
5. 参加者数：25名(男性5名、女性20名、24～71歳)
6. 受講料：6,000円(教職員3,000円)
7. コメント：今回は寒さを考慮して昨年よりもほぼ一か月早い開催とし、より多くの参加者を期待した、しかしながら、予想に反し参加者が集まらず、結果として去年のその数を下回ってしまった。この点については講座開催の曜日、時間、告知方法などの再検討の必要性を感じた。

講座の内容としては、毎回約20名が集い天候にも恵まれて参加者にとっては気持ちの良い教室であった。松田雅之講師のウォーキングおよびジョギングの実践方法に関する丁寧な解説と約50分間の

個々の能力に合わせたジョギングが実施された。ジョギング実施に際しては、ストップウォッチや万歩計を用いて心拍数、歩数等の測定を行いながら、個人個人に適した運動量を指示し、ペース別のグループに分かれて行われた。最終日には、松田雅之講師と親交の深い元マラソン日本代表である瀬古利彦氏のご厚意により駆けつけて頂き、競技場は参加者の笑顔に包まれた。



公開講座「健康ジョギング教室」

3. 所内施設の開放

1) 協生館トレーニングルーム一般開放

1. 期 間：平成22年5月7日(金)～7月13日(火)、9月24日(金)～12月21日(火)、1月7日(金)～1月17日(月)
2. 曜日時間：月・火・金 15:00～18:00
3. 担当者
月：学生トレーナー(大塚真生/大学院経済学研究科修士2年)
火：学生トレーナー(波多野正紘/文学部2年)
金：森下愛子・鳥海崇
4. 利用者数：1,061名
(春学期438名、秋学期623名)
5. コメント：例年と同様に、授業を行わない月曜、火曜、金曜の15:00～18:00においてトレーニングルームの開放を行った。学生間の認知度も上がり、利用者数は年々増加している。近年は時間帯によっては混雑することもあるので、今後はトレーニング機器の占有をせず協力し

合って効率的な利用を促すことを検討していききたい。また、利用者が更衣室を使用した際、貴重品を鍵のかからないロッカーに置いたままにしておき盗難が発生するという事案があった。安全面、効率面だけでなく防犯面にも配慮した運用を心掛けていきたい。



トレーニングルーム一般開放

2) 多目的コートの貸出

1. 曜日時間：平日 授業終了後
土日 終日可
2. 利用状況：302団体
(春学期185団体、秋学期117団体)
3. 日数：215日 /290日稼働
(春学期 117日 /126日稼働、秋学期 98日 /164日稼働)



多目的コート

4. コメント：トレーニングルームの開放と同様に、多目的コートの貸出も塾生間の認知度が上がり、数多くの団体から借用申請が届いた。それに伴いゴミ箱の設置や鍵の管理等、付帯設備へ

の対応を強化した。最近ではバレーボールとフットサルという当初想定した競技種目だけでなく学生団体同士による交流を含めた多目的な利用申請が出されるようになり、「多目的コートの貸出」という題目の本旨に沿った運用形態ができつつある。今後は利用者へのさらなる周知とともに塾長杯バレーボール大会の予選等、塾生の交流の場としての運用を進めていきたい。

4. その他

1) 「2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICA 日本代表を日吉で応援しよう!!」

1. 日時：平成22年6月19日(土)
19:30~22:30
2. 会場：慶應義塾大学日吉キャンパス
スポーツ棟 体育研究所2F
会議室および講義室2
3. 対象：塾生および教職員
4. 参加者：83名(定員約100名のところ)
5. コメント：本企画は予約等の事前登録を求めなかったために、果たしてどのくらいの人数が参加するのかが予想できず、応援に多数の塾生が押し寄せるのか、それとも数人しか来ないのか、どちらにしても蓋を開けるまでは不安であった。しかしながら約70名の塾生とその他教職員約10名、合計83名の適当な参加者数であった。19:15開場を予定していたが早い者は18:00には来場してしまい予定を早めて開場とし、19:30には準備した座席(会議室および講義室2)がほぼ埋まった。会議室のプロジェクターにテレビ中継を投影し、日本対オランダ戦を応援した。テレビ観戦に先立ち、体育研究所専任講師の須田芳正君(体育実技サッカーおよびフットサル担当)と石手靖君(体育研究所准教授・スポーツ振興委員長)により、4年に1度開催されるワー

ルドカップ大会について、そして須田君自身の昨夏までの2年間におけるオランダ留学体験談や現地で接したオランダサッカー界について対談した。集まった学生達は非常に興味を示し、特に日本代表の実力についての辛口なコメントや世界のサッカーのスタイルや文化の違いなどについて熱心に聞き入っていた。試合は須田君の予想した通り、オランダ代表が1対0で勝利したが、日本代表の粘り強い守備の場面や大きな得点チャンス時など、大歓声を挙げての応援となった。試合終了後は速やかな退棟も完了して、適度な人数にてパブリックビューによるスポーツ観戦を楽しむことができた。

IV. 業務活動記録

IV. 業務活動記録

平成22年度総務分野関係報告

1 人 事

- (1) 職員の就任
山名梨沙君（4月1日付）
- (2) 退 職（死亡）
松田雅之君（11月13日付）

- (14) 総合研究推進機構研究倫理委員会研究倫理審査委員会委員
佐々木玲子君
- (15) 人事委員会委員
石手 靖君

2 塾内役職

- (1) 教職員評議員
植田史生君
- (2) 大学寄宿舍舎監
近藤明彦君
- (3) 大学寄宿舍委員会委員
近藤明彦君
- (4) 大学教養研究センター運営委員
植田史生君（所長）
- (5) 大学教養研究センター所員
近藤明彦君、松田雅之君、石手 靖君、
村山光義君、吉田泰将君、加藤大仁君、
野口和行君、村松 憲君、佐々木玲子君
- (6) 大学学生総合センター副部長（日吉支部）
石手 靖君
- (7) 体育会副理事
綿田博人君、石手 靖君
- (8) 日吉キャンパスカレンダー編集委員
奥山静代君
- (9) 極東証券寄附講座運営委員
鳥海 崇君
- (10) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手 靖君
- (11) 立科山荘運営委員会委員
村山光義君
- (12) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
佐々木玲子君
- (13) 記念館運営連絡協議会委員
植田史生君、加藤孝司君

3 研究所内役職の主なもの

- (1) 所 長
植田史生君
- (2) 学習指導主任
綿田博人君
- (3) 学習指導副主任
村山光義君
- (4) 総務委員会委員長
吉田泰将君
- (5) 教育委員会委員長
綿田博人君
- (6) 研究委員会委員長
村松 憲君
- (7) スポーツ振興委員会委員長
石手 靖君
- (8) 将来構想委員会委員長
加藤大仁君
- (9) 50周年記念事業推進委員会委員長
佐々木玲子君

4 留学期間延長

- 野口和行君（アメリカ合衆国）
（平成22年3月20日～平成23年3月19日）

（主事 石井 宣明）

平成22年度活動報告書

平成23年7月1日発行

[非売品]

編集：活動報告書編集委員会

吉田 泰将（委員長）

村山 光義 須田 芳正 加藤 幸司

奥山 静代 鳥海 崇 森下 愛子

発行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45